

続

南伊勢民話



続
南伊勢の
民話

続南伊勢の民話 発行にあたって

民話を通してこの地域に親しんでもらうきっかけになってほしいという思いから、令和二年一二月に『南伊勢の民話』が役場職員有志にて制作され、町ホームページにおいてWEB公開されました。幸いなことに、取組を知ってくださった方々から、電子版だけでなく紙の冊子として作ってほしいという声を受け、翌年三月にあらためて製本版が発行されました。

『南伊勢の民話』については、それぞれ『南勢町誌』『南島町史』の民話の項より採録しましたが、南島地区における民話の掲載が少なく、冊子制作後の反響もあり、この地に伝わる大切な文化の記録を後世に残すためにも、このたび『続南伊勢の民話』が制作される運びとなりました。

冊子制作にあたっては、教育委員会事務局の職員二名が各地区へ足を運んで聞き書きをおこないました。民話や土地に伝わる昔話となると、既に詳しく知っている方は少なくなっており、作業は難航しましたが、多くの方の助けがあり、このたびの発行まで至ることができました。なかには、民話の舞台となった現地まで快く同行案内いただくなど、多大なお力添えを賜りました。

また、巻末に記した参考文献からも多くの話を取り上げました。その際、幅広い年代の方に親しんでもらえるよう、最大限内容は変えず、読みやすさを考慮した編集をいたしました。これらの貴重な資料を制作された方々に敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

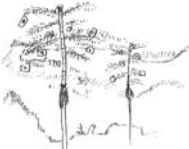
最後になりましたが、楽しく読んでもらえるようにと今回も挿絵を描いてくださった植村君、力強い題字を提供してくださった服部君、制作を応援してくださった皆様、聞き書き取材をお受けくださった地域の方々には絶大なご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。



牛鬼
- 『南伊勢の民話』収録話 -



もくじ

第一章 旧南島地区 の民話	 棚橋竈 P.2	 新桑竈 P.4	 古和浦 P.11	 栃木竈 P.15
 小方竈 P.16	 方座浦 P.24	 神前浦 P.27	 村山 P.34	 伊勢地 P.36
 河内 P.37	 東宮 P.44	 奈屋浦 P.58	 贅浦 P.66	 慥柄浦 P.67
 道方 P.74	 大江 P.74	 道行竈 P.76	 阿曾浦 P.80	 大方竈 P.85
第二章 旧南勢地区 の民話	 切原 P.88	 五ヶ所浦 P.91	 斎田 P.93	 船越 P.93
 内瀬 P.94	 伊勢路 P.94	 相賀浦 P.96	 田曾浦 P.98	
				



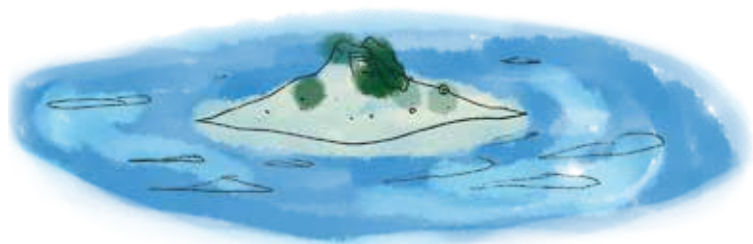
第一章 旧南島地区の民話

棚橋竈 たなはしがま

○くさ島（いくさ島）

棚橋と新桑の間あたりに、くさ島という島がある。ここはかつて陸続きで、大潮の引き潮時には歩いて夜磯などできたといわれている。

昔々、竈方の人たちが北畠氏に仕えていたころ、敵が攻めてきたことがあった。このとき村の人々は舟を出して勇敢に戦い、くさ島のあたりで敵を追いつめたという。それ以来、くさ島はいくさ島とも呼ばれるようになったそう。昔はもっと地面が盛り上がっていたが、月日が経ち、だいぶ沈んでしまったという。



○狼の話 おおかみ はなし

ある日、南の方角の山々から、狼の大群が恐ろしい咆哮と共に村に押し寄せてきた。村の人々は慌てふためいて牛小屋や鳥小屋に板を打ち付けたりして、大騒ぎをした。人々は家々の雨戸を閉めて、犬は床下にもぐ

り込んで隠れた。

古老の言い伝えによると狼の前足は八寸以下に曲がらないといわれており、昔は家を建てる際、床下は七寸より低くつくったそう。低い床下に狼はもぐり込めず、逃げ込んだ犬を襲うことを諦めたという。

○平氏の鎧塚よろいづか

昔、平家の落人おちうどが、長いあいだ戦に使った武具や鎧などを納めるため、平安な時が訪れた時代に塚をつくって鎧塚よろいづかとして碑を建立した。この塚の場所は長い歳月を経て二転三転したため、もともとの場所がどこであったかを特定することはできないという。現在、塚の碑は棚橋竈の個人の敷地内に移されて残っている。（河内加藤實氏より聞書）

新桑竈さらくわがま

○新桑竈の中井戸

① 新桑に過ぎたるものは二つある。

石の井筒※に西川文吾

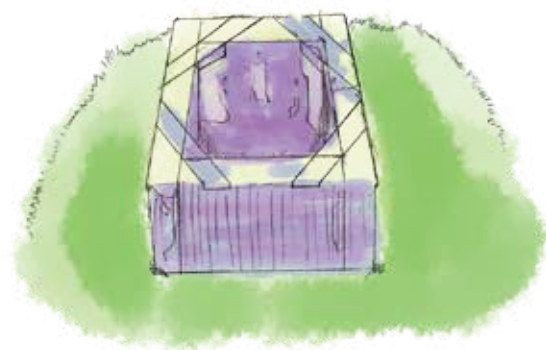
※西川文吾・・・古代より伝わる竈方弓引き行事「日置流」を受け継いでいる人

※島田亀楠しまだかめぐすと唄われることもある

これは新桑竈の偉人と、井戸を讃たたえた伝承である。

かつて、新桑竈の先祖は座佐浜ざさはまに住んでいたが、幾多いくたの災害を経験し、今の地に移り住んできたと伝えられている。ここを永住の地としたことから子孫繁栄のために水源を求めて土地を掘ったところ、良質の淡水がこんこんと湧き出る井戸を掘り当てることができた。この井戸は村のほぼ中央に位置し、後世にわたり多くの人の喉を潤すこととなった。

この地の楠江（楠後）は古くから航行船の避難入江として知られ、海の荒れた日などに四〇隻もの船が係留けいりゅうしたこともあった。多くの船乗りたちは貴重な飲み水を求めてこの井戸を訪れた後、再び長い航海へと旅立つ



ていった。井戸には宝暦十一年（一七六一年）の年号が刻まれている。（河内加藤實氏より聞き書き）

② 集落内に通称、中井戸と呼ばれる井戸がある。昔、新桑竈に移り住んできた先祖が水源を求めて井戸を掘ったが、この辺りは海の目の前であり、どこを掘っても潮が混じった。ついに掘り当てたこの井戸だけは潮が混じることなく、飲み水となる淡水が湧き出たという。現在も水を湛えており、今でもときどき歴史あるこの井戸を訪れる人がいるそう。

○魚の谷の天狗さん

新桑竈の山奥には魚の谷と呼ばれる谷がある。昔、大津波が起こったときに大量の水が川をさかのぼり、この谷になだれ込んできた。水が引いていったあと、周りの木々に魚がたくさん引っかかっていたので、魚の谷と呼ばれるようになった。

この魚の谷には天狗さんがいて、天狗さんが出るときは山へ行っはいけなというわれていた。あるときなど、天狗さんが出るというので五日も六日も山へ行



けなかったこともあったという。天狗さんとは、ツチノコ、ニク、カモシカのこと。
また、新桑竈では一人で山へ行くと物の怪ものけに憑つかれるといわれている。

○アマコロビと膏藥こうやく

姫越山ひめごやまの山頂付近さんちようふきんに、尼転あまころびと呼ばれる広く平らなところがある。昔、お姫様に付いて世話をしていた人（尼さんあま）が水を汲くみにいったときに転んでけがをしたところなので、こう呼ばれるようになった。

さて、転んでけがをした尼さんは、さっそく薬草で練り薬をつくった。この膏藥こうやくは大変よく効くものだった。そうで、村でも評判となった。あるときから村の医者屋いしやさんに作り方が伝わり、それ以来その医者屋さんがつくっていたが、今から五〇年ほど前に途絶えてしまったといわれている。



○新桑さらくわのクツワムシ

クツワムシはふつう、ガチャガチャと鳴くが、新桑さらくわと棚橋たなはしのクツワムシは不思議なことに鳴かないのだという。それは昔々の源平合戦の時代、ある平家の人々がクツワムシを皆殺しにしたからだとか。

また、新桑竈の前の浜には小さく可愛いカニがたくさんいた。そのカニの爪先は真っ白で、夜になるとたくさん這い出てきたカニが一斉に腕を上げ下げし、踊っているようにみえた。平家の落人たちが憑ついているとかいないとかで、村の人々には平家蟹へいけがにと呼ばれていたという、竈方らしい話。

○大蛇だいじゃの話

昔々、ある人が玄関を開けると目の前に大きな蛇へびがいた。その蛇は見たこともないようなおそろしい顔をしていたので、見つけた人は腰を抜かして「蛇の化け物が出た」と叫び、村中大騒ぎになった。騒動をしていると勇気のある男の人が出てきて、槌つちでコツンと大蛇の頭を叩いたところ、蛇は半分のみ込みかけた大きな蛙を吐き出したという。



○子安こやすの地蔵じぞう

新桑竈の集落から姫越山ひめこやまへ通じる山中に、お地蔵さんが祀まつられている。寛政七年かんせい（一七九五年）と刻まれ、いまから二〇〇年以上前からこの地に祀まつられているお地蔵さんは、子安こやすの地蔵じぞうと呼ばれており、大きな岩で組んだ祠ほこりに鎮座ちんざしている。

村の人々はお参りをする際によだれかけを持っていき、子安地蔵さんにかけて安産祈願をする。祈願のためにかけられたよだれかけは幾重にも重なり、やさしい表情のお地蔵さんは今でも村の人々に慕われている。

また、この子安地蔵さんの隣にも別のお地蔵さんが祀まつられ、子安地蔵さんとともに奥の地蔵さんとも呼ばれている。このお地蔵さんは元は姫越山の姫が塚と呼ばれる山中の岩上に鎮座されていたが、参拝者の便をおもった人が今の場所にお移しされたそう。寛政元年（一七八九年）と刻字されている。



○新桑竈の救世主しまだかめくす 島田亀楠

江戸時代には三つの大きな飢饉ききんがあった。天保てんぽうの飢饉はその一つであり、飢饉はこの地方にも押し寄せて、

新桑竈はもはや立ち直ることができないほどの被害を受けた。飢饉は急にやってくるものではなく、長い間の不景気と重なったために、その惨さは想像以上のものであったという。

大雨や冷害による大凶作が続いてついに村の財政が尽き、どうにもならなくなった新桑竈では、座佐山ざさやまを売ることにした。どこへ売るのがを相談した末、野後村のじりむらの山林王であった吉田家へ、一三〇町歩の山を売ることに決まった。天保一三年（一八四二年）のことである。

この座佐山売買の約束から三〇年経った明治五年（一八七二年）に、島田しまだ亀楠かめくす（かめぐすとも呼ばれる）は区長になった。新桑竈の集落は山々に囲まれており、狭い田畑で生活していかなければならなかったが、そのころの新桑竈は木を切るにも山はなく、田畑もやせ細っていくばかりであった。このありさまを何とか救わなければならないと亀楠は悩んだ末、天保時代に売った座佐山を返してもらうのはどうかと考えついた。

さっそく当時の裁判所へ訴え出たが、売ってから三〇年以上が経っており、返してもらうことはできなかった。

それでも亀楠は諦めず、座佐山がなくては新桑竈を立て直すことはできないと考え、神前の加藤伝次郎かとうでんじろうや、道行こまつの小松作右衛門さくえもんたちにも協力を願い出た。彼らはみな、村のためだと快く引き受けて、同じ在所にしかわの西川勝吉かつきち、島田権四郎とともに、吉田家へ通うことにした。

吉田家への訪問は一〇数回にも及び、新桑竈はどの家ももう食っていくことができな
い、どうかお助けくださいと、何度も何度もうったえたという。

見るに見かねた吉田家が、座佐山の植林地しょくりんち以外の雑木林ぞうきばやしだけ売ってくれることと
なった。もちろん、新桑竈にはそれだけのお金はなく、借金をして買い戻したのである。



しかし、これで新桑竈の人たちには雑木林を切る仕事ができた。そしてまたたく間に借金の約半分に値する
お金ができ、そのうえ吉田家が材木を売ることにくらかのお金新桑竈へ入ったので、三年間でこの借金を
返すことができたのである。村のみんなは亀楠さんたちに救われたと泣いて喜んだという。

当時、新桑竈は慥柄組たしからくみの仲間に入っていたので、区長たちの集まる会議は慥柄で開かれることが多かった。
そんな集まりでは、亀楠は実にさっぱりとした、しかも太っ腹な人だったので、他の区長たちからも大変信頼
され、大切な人として頼られていたという。今でも次のような言葉が残っている。

『新桑竈には、すぎるものが二つあり。島田亀楠と石の井戸』

このように亀楠さんは生まれ育った郷土である新桑竈のために立派に尽くした人であったが、明治一一年
(一八七八年)に三四歳という若さで惜しくもこの世を去られた。たくさんの人に慕われていた亀楠さんを思い、
村中みんな深い悲しみに包まれたという。

古和浦 こわうら

○法眼寂円ほうげんじやくえんと古和一族こわいちぞく

いまから七〇〇年近く前のこと。ある日、伊勢の屋敷やしきに法眼寂円ほうげんじやくえんという僧が呼び出された。屋敷の主人の名は北畠親房きたばたけちかふさという。そのころ後醍醐天皇ごだいごてんのうに仕え、伊勢地方を治めるために国司をしていた人物である。

南勢地方には天皇に心から尽くそうという一族がいて聞いていた北畠親房は、寂円じやくえんをその一族のもとに遣つかわせることにした。寂円はこの命を受けて出立し、危険をとまなう道中であつたが、ついに最後の目的地である古和浦に到着した。

そして古和一族が本当に天皇に味方するものなのか、十分な働きができるのかということを見極めるため、大納地区だいのうにあつた納戸寺なんどじ（現在は失われている）に住むことにしたのである。

寂円はしばらくこの土地で過ごし、彼らが信用に足るとわかると、一族を呼び寄せて自分の身分とこの地にやってきた目的を話した。寂円の話聞き、どれほど自分たちを必要としているかを知った古和一族は、自分たちの命を捨ててまでも心から仕えることを決意したという。

当時、古和一族は奥・上村・向・借屋の四つの姓を名乗る人々を中心とし、普段は漁業や農業をして暮らしていた。そしていざ戦となると武器を持ち、峠を越えて戦場へ向かった彼らは少しも疲れをみせなかったという。

戦場に出た古和一族の働きはすばらしいものだった。その姿はまさに古和^{こわ}氣質^{かたぎ}そのもので、敵の大軍にひるむことなく、勇ましく堂々と立ち向かったと伝えられている。各地で起こった戦も、古和一族が戦に加わると押されていた味方の軍勢は活気付き、敵を打ち破るほどの力を出したのであった。

また、古和一族は水軍としても力を発揮し、熊野灘^{くまのなだ}一帯で重要な役割を果たした。こうした一族の働きが認められ、ついには数々の恩賞料所^{おんしょうしよ}を得ることになった。北畠親房に仕えることを誓ってから八代、二三〇年もの長きにわたって心から尽くしたのである。



日本史のなかの南北朝時代において大きな役割をはたした古和一族であったが、時の流れとともに一族は散らばってしまい、しだいに人々から忘れ去られてしまった。

しかし、古文書がのこっていたことから、時を経て古和一族の歴史は甦^{よみがえ}ることとなる。昭和九年（一九三四年）、このことを知った古和浦の青年団が中心となり、村人に呼びかけて、港が見える八柱神社の近くに古和^{こわ}一族軍忠碑^{いちぞくぐんちゆうひ}を建立した。今でもこの碑は村の人々に大切にされている。

ところで、危険をかえりみず使者としての使命をはたした寂円は、その後、大杉谷の大淵寺^{だいえんじ}におちついたといわれている。

○これより先スントーロク

サイノカミはもともと境^{さかい}の神であったといわれ、古和浦でも他村との境界点に祀^{まつ}られているという。この地方ではほとんど滅んでしまった祭りであるが、古和浦には残っており、たいへん貴重な祭事となっている。古和のサイノカミの依り代^{よりしろ}は自然石で、かつて古和の東西南北にあったといわれるが、現在では三ヶ所となっているそう。

古和では歳末大祓いの行事の内に三ヶ所のこっているサイノカミにシメを掛け、「これより先スントーロク」と唱えて災厄の侵入を防ぐ。昔、この意味を村人にきいてまわった人がいたが、知っている人は見つからなかったという。

○軍船撃退ぐんせんげきたい

慶長六年（一六〇〇年）、関ヶ原の役で大阪方に味方した九鬼嘉隆くきよしたかと堀内氏善ほりうちうじよしは、西軍敗戦となったので鳥羽を出て南下し、古和浦に入船して上陸することにした。これを知った古和浦では、村の人々が蹶起けつきしてこの船を迎え撃ち、一步も上陸を許さなかったという。



九鬼・堀内の水軍はやむなく古和の港外に逃れ、今度は贅浦の豆方に船を寄せた。しかしこれも上陸の目的を果たせず、ついに湾外へ去っていったと伝えられ、この話は中世末期における古和武士団の勇武を物語る。

○天狗松てんぐまつ

古和浦の殿山とのやまの頂上に大きな松の木があり、そのあたりから瀬戸物せとものが出ることがあった。そこからは笛や太鼓の音が聞こえてくることがあるというので、あるときわざわざ見に行った村の人がいたが、再び帰ってくることはなかった。



○勘太風かんたかせ

昔々、勘太屋かんたやの父子と源七が沖へ漁に出て、西の強風のために遭難して亡くなり、勘太屋は絶えてしまったという。それ以来、いつのころからか古和浦では強い西風のことをカンタカゼと呼ぶようになったいわれている。

栃木竈とちのきがま

○天神山

かつて、北野神社は栃木竈字天神に鎮座していた。古老の口碑こうひによると、昔むかし天神浜の砂上に漂着した御神体まつみをお祀りしたのがはじまりといわれている。この北野神社は現在、古和浦の八柱神社境内社として鎮座している。

（河内加藤實氏より聞書）



○栃木竈の雨ごい

昔は海に近い地域でも、農業をしているところでは雨が降らないことは深刻な問題であった。道方では雨ごいのために一同が寺にこもり、大滝に詣^{まい}って祈禱^{きとう}をしたあと、広場で雨ごい踊りをしたとされる。それでも雨が降らないと、「不動のかなしばり」として不動尊を縛って降雨を促した。同じく栃木竈でも雨ごいをしたが、栃木竈では最後にはお地藏さんを縛って降雨を強要したという。

小方竈^{おがたがま}

○天才画家野村訥斎^{のむらとつさい}

野村訥斎^{のむらとつさい}は、江戸時代に画界^{がかい}最高の名誉、禁裡^{きんり}御用^{ごよう}絵師^{えし}として活躍した画家である。

あるとき訥斎^{とつさい}が懷^{ふところ}から何かをつまんで口に入れ、嚙^かんでいるのを見た人がいた。その人は薬かと思い、どこが悪いのかと尋ねると、「これは中国の本に書いてあった飢え^うの時の米というやつだ。私は絵を描き出すと夢中になって飯を炊く暇がない。そんなときに水に浸しておいた米を口にいられているのだ」と答えて驚かせ

たという。

訥齋は天保二年（一八三一年）に小方竈おがたがまで生まれ、名前を亀松かめまつと呼ばれていた。父である惣右衛門そうえもんは村の世話役をしていたので、村人からの信望は厚かった。

亀松少年は絵の才能に恵まれ、二、三歳のころには既に人を驚かす絵を描いていたという。

あるとき、絵に詳しくった神前浦じんぜんうらの地藏院じぞういんの慧剣和尚けいけんおしょうは亀松の絵に秀でた才能を見出し、亀松に絵の描き方を教えることにした。亀松は日に日に上達し、一二歳になったときに和尚から『月峰げつぽう』の号をさずかることとなった。

江戸へ立つ

月峰の号をさずかったものの、まだまだ自分の腕に満足していなかった亀松は、十六歳になったとき江戸に出て大成たいせいしたいと考えて村を出立しゅったつした。当時、江戸は有名な画家の集まる地であった。

江戸では師匠となる人を探すため、多くの額縁屋がくぶちやを訪ね歩いた。そして亀松は大西椿年おおにしちんねんのことを知った。京風きやうふうの絵の描き方で大成した人であり、歴史に残る有名な画家、円山応挙まるやまおうきよの門下であった。

亀松は、ぜひ内弟子うちでしにしてほしいと椿年ちんねんを訪ねたが、大変評判の高い人であったので入門の許しがでなかった。それでも諦めなかった亀松は、成田山なりたやまにお参りをしたり、何度も通って頼み込んだという。その熱心さに心を動かされ、とうとう椿年は入門を許した。

椿年のもとでは厳しい修行の日々が続いたが、亀松は自分の腕を磨くことを忘れなかった。

そしてある日、椿年は亀松の絵を見て、自分の絵を継ぐのは亀松かもしれないと気付いたという。椿年は亀松の画才を認め、『雪窓』^{せつそう}という号を与えた。『螢の光 窓の雪』^{ほたる}という、苦学^{くがく}した人を表す故事からとった号である。

江戸へ出て四年が過ぎた一〇月のこと。生まれ故郷の小方竈^{おがたがま}で竈方祭りが近づいていたとき、二〇歳になった亀松は帰ってきた。突然のことに、父母や親戚は大変喜んだという。

両親は亀松にこれからも小方竈にいてほしいと思い、贅浦^{にえうら}から妻をおかえることにした。結婚した亀松は呼び名を万兵衛^{まんべえ}と変え、一女の父となったが、この子は間もなく死んでしまった。しばらくは静かな生活を送っていた万兵衛だったが、画業は続け、地藏院や紀州、志摩で弟子をとって多くの作品を残したという。

しかし万兵衛が二三歳になったとき、父である惣右衛門^{そうえもん}がなくなった。父をなくした悲しみに長いあいだ気抜けしていた万兵衛であったが、不幸にもまた、愛していた妻にも先立たれてしまう。重なる不幸に戸惑っていた万兵衛であったが、ついに雪窓^{せつそう}として京^{きやう}（京都）に行く決心をした。このとき二八歳であった。

雪窓は京へ行く途中、田丸の広泰寺^{こうたいじ}へ寄ることにした。そのとき雪窓^{せつそう}の常人では描けないような絵をみて、仏覚和尚^{ぶつかくおしょう}は大変驚いたそう。ここで知らぬ間に二年過ぎってしまったが、広泰寺^{こうたいじ}で描いた『猛虎の図』^{もうこず}は傑作

として知られている。

雪窓は京へ着くと、円山^{まるやまおうりつ}応立を訪ねた。江戸で大西椿年^{おおにしちんねん}を師として修行したことを話し、自身の絵を見せると応立は直ちに入門を許したという。

御用絵師 訥齋の誕生

応立の門へ入ってから三年ばかりが経ったころ、雪窓の技^{わざ}がついに花を咲かせる出来事があった。

当時、幕府では仁考^{にんこうてんのう}天皇の皇女、和の宮^{かずみや}の婚礼準備で賑わっており、その婚礼の衣料係として、豊岡随賢^{とよおかずいけん}が選ばれた。

衣装である袴^{はかま}の絵は、ならわしにより秋の七草^{ななくさもよう}模様を描くことになっていた。随賢^{ずいけん}はこの絵を描くことを円山応立に命じた。

この絵はそのまま江戸まで送られ、必然と江戸の絵師達の目にもとまる。決して笑われることのない絵を描かなければならず、大変な重圧であった。応立は仕事場を清掃し、畳^{たたみ}を敷き替え、襖^{いすま}まで張り替えて準備を整えた。

しかし、静かな部屋で一人、応立はどんな絵にするかを考えたが、どれだけ考えても良い案が思い浮かんでこない。悩み迷った末に、応立は使いを送って雪窓を呼び寄せることにした。応立のもとに着いた雪窓は、代筆^{だいひつ}の相談を持ちかけられたのである。



雪窓は自分にこの仕事を成すことができるのかと、迷いに迷ったが、師の悩み苦しんでいる姿をみて、放っておくことはできなかった。引き受けることを決心すると、二昼夜かけて桔梗をあしらった絵を完成させた。見事な秋の七草模様であった。

袴は随賢の手に渡った。随賢がその絵に見入っている姿をみて、応立は「よし」といわれるか、「いかん」とされるか、ただ固唾を呑んで見守っていた。万が一、代筆とわかれれば罪になる。

暫くの沈黙のあと、随賢はついに口を開いたかとおもうと「これはそなたの作品ではない」と声を荒げた。そして、本当の作者は誰かと問うた。

応立はその言葉を受けて平に謝罪し、本当のことを話した。しかしめでたい婚礼のことだということで、随賢の寛容さにより罪は不問となったが、直ちに雪窓が随賢のもとに呼び出された。

雪窓はこの知らせを受け代筆の罪に問われることを確信し、それでも慌てまいと覚悟しながら向かったという。雪窓が到着すると、予想に反して随賢はこのたびの仕事を労い、雪窓を褒め称えた。そして婚儀ゆえに代筆の罪に問わないことを伝えられると、雪窓は心から安堵した。

さらにこのとき、随賢から雪窓を禁裡御用絵師として推薦したいとの申し出があり、雪窓は夢ではないかと耳を疑ったという。その上、「訥斎」という雅号まで授かった。こうして御用絵師としての訥斎が生まれたのである。

故郷への道

禁裡きんりとは宮中きゆうちゆうのことで、訥齋は幕府から俸給ほうきゅうをもらって用命を果たす画家となった。訥齋は門前へ禁裡御用絵師と書いた提灯ちようちんを立てることを許され、宮中の絵描きとして天皇のお用いもちになる屏風びやうぶの絵を描いたり、殿様の息女の婚儀などにつかう松竹梅しょうちくばいを描くなど、画界において素晴らしい仕事をした。

禁裡御用絵師となるのは画人として最高の名誉であり、田舎から出てきた訥齋にとっては夢のような出世であった。しかし御用絵師ともなると、いつも京にいなけなければならなかった。訥齋には次々と御用ができて故郷へ帰る暇もなかったが、一度故郷に錦にしきをかざり、母を喜ばせたい、そしてお世話になった仏覚和尚ぶつかくおしょうにお礼を言いたいという思いが募り、とうとう京を出て、まずは田丸の広泰寺こうたいじへ向かった。

広泰寺こうたいじへ着き、仏覚和尚を訪ねると、和尚は訥齋の出世を自分のことのように喜んだという。

「明日は精一杯、絵筆をとりましょう」と約束をしたその晩、突然訥齋は発熱して床に伏せた。故郷を一步手前にして、病は訥齋を苦しめたのである。このことはすぐに小方竈の母親のもとへ届き、親戚中が驚いて広泰寺へ見舞いの人々が走った。

それでも訥齋はあと少しと、病める体を励ましながら小方竈へと向かい、やっとの思いで故郷へ着いたが、野村一族に手厚い看護を受けながらも間もなく帰らぬ人となった。

元治元年二月（一八六四年）、享年きょうねん三四歳であつた。訥齋のなきがらは竈方の本山である大方竈おおかたがまの大知院で葬儀をすませ、そして小方竈の墓地へ葬られた。

「ただ骨をうずめるために故郷へ帰つたような不運な天才画人」と、あまりにも早すぎる死に、村の人々だけでなく、多くの人からも惜しまれた。豊岡随賢とよおかずいけんは「この世に、本当になさけというものがあるのだろうか」と悲しみ泣き崩れたと言ひ伝えられている。

○区民の鏡と呼ばれた人

天保一一年（一八四〇年）、野村弥吉のむらやきちは小方竈おがたがまに生まれた。農業を主にして暮らし、無駄遣いをせずつましく生きようと日々自分に言い聞かせていたという。人にやさしく、情け深い人柄で村人から信望があり、長いあいだ村の役員等を務め、その仕事ぶりは皆が認めていた。

当時の小方竈は貧しく、どの家も借金がたまって苦しい生活が続いていた。

そんなとき、ある人が村に黙って小方竈の名前を使い、一五〇〇両もの大借金をしてしまった。

村の代表をしていた弥吉は、その借金を返すため自分の財産すべてを投げ出したが、それでも五〇〇両ほど

あっただけで、残りの一〇〇〇両の借金はどうすることもできなかった。

そこで村中が大騒ぎになり、村人たちは思案したあげく、小方竈の共有の山林を売って金にかえようという案がでた。しかしそれを知った弥吉は、共有の山林は皆の大切な財産であり、全て売ってしまうよりも村の皆で一生懸命働き、節約をして工面することを呼びかけた。それから弥吉は率先して働き、初めは納得しなかった人も少しずつ協力してくれるようになったが、すぐに楽な暮らしができるようになったわけではなかった。

小方竈の人たちの苦しい生活は一〇数年間続いたという。しかしそのかいもあって、村の中には多少の貯えができる者も出てきた。そのために、共有の田んぼと山林を少し売っただけで、一〇〇〇両あった借金を返すことができたという。

弥吉はまた、小方竈の将来についても様々なことを考えた。なかでも、共有林を計画的に切るきまりを作ったことは後世にも伝えられた。弥吉は村人に木を植えることがいつか自分たちを救うことになる、熱心に説いてまわったという。そうして、数年後には小方竈のまわりは深い緑色をした山々になっていった。

このように村のことを思い、村人のために尽くした弥吉であったが、五八歳でこの世を去った。村の人々はその死を惜しみ、とても悲しんだ。

弥吉が亡くなってから一五年後、弥吉の考えた共有林を切るきまりを守った小方竈の人たちは、経済的に困ることもなくなり、だんだんと豊かな村になっていったという。弥吉は自分の財産や名誉を気にせず、人々の

ことを思い尽くしたからこそ、後世までその名を残すことができたのだと村人たちは深く感心した。

その後、弥吉を称^{たた}える碑がたてられることになった。そのころの度会郡長から、「五〇年間大変真面目に働き、贅沢をつつしんで節約を心がけ、暇があれば区民のだれかれを問わずに助けたこの弥吉さんは、本当にすばらしく、区民の手本のような人だ」と賛辞^{さんじ}が贈られたという。

方座浦^{ほうざうら}

○最初の六十四軒

方座浦にはもともと六十四軒が最初に移り住んできたといわれる。また、この土地へ人々が移り住んできたのは方座浦のほうが早いのか、小方竈のほうが早いのかということが、ときどき両郷の人たちで言い合いになるという。

○自慢の方座ウルメ

村のはじまりについてくわしいことはわからないが、一説では商人も多かったといわれ、船で特産物を運ぶ商売も盛んであった。なかでも方座ウルメ（ウルメイワシ）といえは江戸でも有名であったという。

また、方座浦から小方竈へ入るところに灯台の代わりになる灯籠があり、それを目印に入船すると、座礁せずスーッと港に入ってくるのができたといわれる。その灯籠は伊勢湾台風のときになくなってしまい、探した人もいたが見つからず、いまではどこにあるのかわからない。

○方座浦の浅間さん

方座浦浅間さん（浅間祭）の祭神、木花之佐久夜毘売については諸説あるが、方座浦に伝わる一説によると次のような話がある。

木花之佐久夜毘売は、石長比売と姉妹であった。姉の石長比売は美しく、妹の木花之佐久夜毘売は醜かったという。美しい姉は妹を守るため、自分と一緒にいてはいけないと気をきかせて浅間山にあがっていったきり、帰ってこなかった。浅間祭で使われる大幣・小幣はこの二人をあらわしていて、この大幣・小幣を男



衆が担いで浅間山を駆け登るのであるが、小幣が勝つとその年は良いとされる。

この神話については、一般的には姉が不美人で妹が美人とされているところであるが、方座浦ではいつのまにか逆転し、姉が美人で妹が不美人と伝わっているそう。

○方座浦の鬼門日きもんび

その昔、一月一〇日に方座浦で大火災があった。村が半分焼ける大変な大火事であったと伝えられている。それからまた別の年の一月一〇日、方座浦の人たちが乗っているカツオ船が八丈島の近くでシケに遭って大勢亡くなるということがあり、いつしかこの日は方座浦の鬼門日きもんびと呼ばれるようになった。

また、方座浦には十日祭とおかさいとよばれる祭りがある。毎年一月一〇日におこなわれる祭事で、弓引きをおこなう。この際に一メートル九〇センチもある的をつくり、その的めがけて弓を引く。最後に弓で射た的をちぎり、その紙を玄関に鬼よけとして飾るのである。五穀豊穡ごこくほうじょう・無病息災むびょうそくさい・大漁万作たいりやうまんざく・福の神を祈りつつ、鬼門日である一月一〇日になにもないことを願い、村の人はこの祭りをなくしてはならないと言う。

神前浦 かみさきうら

○与崎の松 よざきまつ

かつて神前湾かみさきわんのすぐ近くに巨木が立っており、地元の人々からは『与崎の松よざきまつ』と呼ばれて長く愛されていた。港に入ってくる船からもよく見え、一本だけ飛び出るようにしてそびえ立っているこの巨木は、さながら神前湾のシンボルであった。

樹齡は三〇〇年を超えていたといい、南島郵便局では現在でも吉津灯台よしづとうだいとともに消印として意匠いしょうされている。長く愛されたこの与崎の松は昭和の終わりごろに失われており、落雷で倒れたとも、枯れてしまったともいわれているが、いまでも地元の人々には懐かしい神前湾の遠景として記憶に残っている。



○飛鳥浜 あすかはま

神前湾入り口にある飛鳥浜あすかはまには飛鳥池あすかいけと呼ばれる池がある。この地にはいくつかの伝説があり、様々に語られている。

① 飛鳥池には白蛇が棲すむといわれており、そのおかし、大病を患わづらった人が信仰したところ、白蛇に出会い病氣から回復したという。

また、このあたりで貝を採って食べても、貝殻は返さなくてはいけないと言いい伝えられている。あるとき、言いい伝えを守らずに貝殻を返さなかった人がいた。採採ってきた貝を食べていつものように就寝した晩、夢枕に大きな白蛇が現れて大変驚き、あわてて返しにいったという。

この飛鳥浜には飛鳥神社があり、いまでも地元の漁業者たちは大漁を祈り大切に祀まつっている。

② あるとき、漁師の親子が飛鳥浜に漁をしに峠道を下っていると、にわかに空が曇り出した。あたりは暗くなり今にも雨が降り出しそうである。親子は仕事にならないので引き返そうと思いい、ふと飛鳥池のあたりを見ると、池を出て今にも天に駆け上ろうとしている見事な白龍はくりゅうの姿があった。たいへん驚いてその上空を見ると、空には綺麗な虹きれいなが出ていたとか。親子はさっそく家にもどり、家族や村人に昼間の飛鳥池での出来事を話したところ、すぐに村では飛鳥池の龍の話で持ち切りになったそう。



この飛鳥池の龍は、かさらにぎ池なやうら（奈屋浦）の龍と夫婦の龍であり、片方は白龍、もう一方は青龍せいりゅうであるともいわれ、年に一度、吉津湾よしづわんの天空で再会すると伝えられている。この日に龍の姿を見かけると禍わざわいを招くともいわれているので、地元の漁師は仕事を休み、龍の再会をそっと気遣ったという。（河内加藤實氏より聞書）

○倭姫命腰かけ岩と神前浦

やまとひめのみこと

かみさきうら

昔むかし、倭姫命やまとひめのみことは、父である垂仁天皇すいにんてんのうの命を受けて天照大神あまてらすおおみかみの宮処みやどころを求めて各地を巡っていた。あるとき、伊勢国に入ると大神様からのお告げがあり、五十鈴の河上に斎宮を建てたという。

この斎宮探しの途中に倭姫命一行がこの地にやってきた際、長旅の疲れを癒いそうと石に腰をかけて休まれた。一行が休息をとっている間に東の空が白んで夜が明け、その暁あかつきのなかにくっきりと岬が現れたのをみて、この地を明崎あかさき（赤崎）と名付けた。そして岬の先端の集落が大神様の前にあることから、ここを神前かみさきと名付けたという。いまでもこの石は倭姫命腰掛岩として、河内川の河口付近に残されている。（河内 加藤實氏より聞書）

○定有と吉津党

さだあり

よしづとう

今から約六五〇年ほど前のことである。吉津地区には吉津党よしづとうと呼ばれている人々がいた。ほとんどの人が吉津よつの荘で農民として生活をしている人たちであり、普段から一緒に汗を流して田畑を耕したり、酒を酌み交わしたりしているたいへん結束力が強い一党であった。その吉津党の頭領とうりょうに、加藤佐衛門尉かとうさえもんのかみさだあり定有という人がいた。あるとき、定有さだありの家に国司こくしの使いが書状を持って来た。戦へ出よとの命であった。定有は命に従い、党を引

き連れて三つ坂みつざかを越え、今の松阪のあたりにて戦に参加した。延元二年えんげん（一三三七年）四月一日、東黒部ひがしくろべ浜で
の戦である。このとき吉津党は先陣として力の限り戦ったといわれており、翌日には大口浜おおぐちはまへ敵が攻めてきた
が、ここでも獅子奮迅ししふんじんの活躍をし、負傷者を出しながらも見事敵を追い払うことができたという。

それから六年間、何度か戦が繰りかえされ、そのたびに定有とその一族は命がけの戦へ出た。吉津党は戦に
出ると大奮戦をし、めざましい働きをしたのであるが、その背景には定有の厚い人望があったからだといわれ
ている。部下を思うやさしさと勇猛果敢ゆうもうかかんさがあり、松阪の戦いではいつも自ら先陣に立っていたという。この
ようなことから吉津党と言われた人々の結束力は並大抵のものではなかったと伝えられている。

○薬師城址やくしじょうし

昔々、日本史における南北朝時代なんぼくちようじだいにも遡さかのぼる話。神前浦に、加藤かとう、小島こじま、脇わき、高川たかがわという姓を持った人々が
鎌倉かまくらからやってきた。

この者たちは吉津地域に根付き、次第に勢力を持ってこの地を治めるようになって、神前浦の中心部にある
薬師山とりでに砦とりでを築いた。ここは周囲に葦あしが生い茂る沼地であり、もう一方は海に面していたので容易に立ち入る
ことのできない、まさに山城であった。

この城の城主は吉津の豪族、加藤佐衛門尉定有であつた。定有は南北朝時代、伊勢の国司である北畠親房とともに南朝方で活躍し、吉津党を盛り上げて数多くの軍功をあげたといわれている。

現在の城跡には広厳寺（薬師堂）が建ち、地元の人々には薬師さんの愛称で親しまれている。お堂には薬師如来像が安置され、古くから眼病に効ありと伝えられている。（河内加藤實氏より聞書）

○村民に慕われた加藤市右衛門

寛政八年（一七九六年）のころ。神前浦に加藤市右衛門という人がいた。広い心を持ち、先を見通す決断力をそなえ、そのうえ一生懸命に働く人であつた。また、狼の遠吠えを聞くために、深夜に山奥に入つたとも言われているほど、勇敢で好奇心の強い人物であつたと伝えられている。

そしてこの地方における指折りの財産家として知られ、東は泉・神津佐から西は錦、北は伊勢市付近までの資産が広がっていたとされる。「この財産は、決して自らの私利私欲のために使つてはならない。貧しく、困っている人や、村の発展のためにこそ使わねばならない」という市右衛門の決心は、一生涯揺らぐことはなかったという。

市右衛門が四〇歳のころ、天保の大飢饉^{だいききん}が起こった。当時この一帯では村を離れる人や、餓死^{がし}する人が四〇〇人にも及んだという。

この様子を見た市右衛門は、飢えに苦しむ人々を救うため、ためらうことなく自らの倉^{くら}を開いて、米を村人たちに分け与えた。救われた人々は深く感謝し、市右衛門を慕^こった。

この出来事は紀州^{きしゅう}の殿様の耳にも入り、市右衛門に「苗字^{みょうじ}帯刀^{たいとう}を許す」という仰せがあった。昔は武士の家系ではない限り、刀を腰に差すことはおろか、苗字を使うことも許されていなかったが、市右衛門は地士を申し付いたのである。地士とは郷土における武士^{じざむらい}（地侍）のことであり、市右衛門は侍の資格を与えられた。当時にあつてはこの上ない名誉なことであつた。



それから約二〇年後、安政^{あんせい}の大地震が起きた。たいへんな大地震で、十メートルにも達する大津波が吉津村を襲い、逃げ惑う人々で村中がたちまち大混乱になった。家は六十軒流され、多くの田畑は潮を被って駄目になり、波に流されてなくなった人もたくさんいた。神前のほとんどが海水に浸かったのである。

このときにも市右衛門は自らの米倉を開け放ち、中にあるすべての米六〇〇俵を出して村人たちを飢えから救った。「地獄^{じごく}で仏に会ったとはこのことだ」と、村人たちは市右衛門のおこないを褒め称えたという。

市右衛門は日ごろから村人たちの生活が安定し、良くなることを願っていた。そのため、仕事がない人には仕事を見つけてやり、病で苦しむ人には薬を分け与えたという。また、漁師にはお金を与えて舟を造らせたり、網を買わせたりもした。今では残っていないが、方座坂に桜の木を植え、けわしい坂を行き来する人の心を楽しませようとしたのも市右衛門であった。

あるとき、藩はんの財政が苦しいことを知って、二五両のお金を差し上げたこともあった。そのお礼として紀州の殿様から素晴らしい銀の花かごをいただいたという。この花かごは、田丸領内たまるりょうない（現在の度会・多気）でも、三人にしか与えられていなかった貴重なものであった。

また、市右衛門は文学にも詳しく、太平記たいへいきという何十巻もある本をすべて筆で写し取ったという話もある。根気のいる仕事であり、たいへんな努力家であったことが伝えられている。

年をとってから病気をしたが、その病気が治ったときによんだ短歌が残っている。

『惜しからぬ老の山路をながらへて治まる御代の花をこそ見め』

明治一一年（一八七八年）、村の人々が氣遣うなか、市右衛門は八三歳でなくなった。悲しみ、別れを惜しむ声が村中に満ちたという。葬儀の日には、村の人々がみんな仕事を休んでおまいりし、市右衛門との最後の

別れを惜しんだ。葬式に参列した人の列が、遠々数百メートルも続いたといわれている。

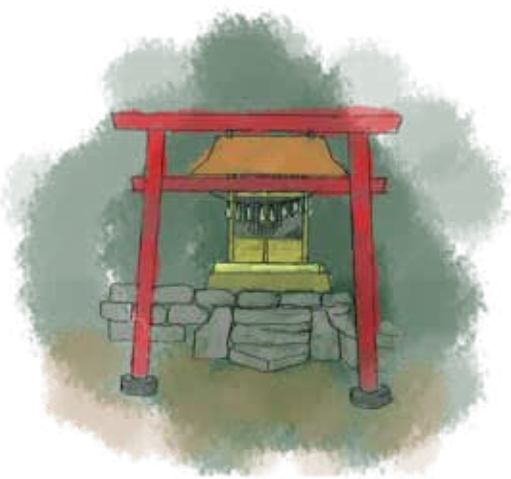
現在、神前浦の薬師山には加藤市右衛門の徳をしのぶ石碑が建てられている。高さ三メートルを超える大きな石碑である。昭和二年（一九二七年）に、神前浦の人々が市右衛門の功績をたたえ、後の世の人々に伝えるために建てられたという。翁はこの薬師山からいつまでも神前の人々を見守ってくれている。

村山 むらやま

○雨ごいの言い伝え

昔は各地で雨ごいがおこなわれていたが、その村々によって祈願の方法が異なっていた。道行竈^{みちゆくがま}はお経をあげて夜におはぎなどを作って寺にこもり、新桑竈^{さくらわがま}では滝つぼへ泳いでいって祈願していた。東宮^{とうぐう}ではこがれ池で僧が読経したあとに人々が池に入って泳ぎ、池の水をカラクル（揺さぶる）ことで雨ごいをしたという。

村山においては不動の滝にて雨ごいをおこなっていたのであるが、滝つぼでフンドシを洗うことでそのケガ



レにより雨がもらえろと言ひ伝えられている。

○山の神さま

村山では、山を買ってはじめて仕事をするときには山の神さまを祀る。山の神さまの木は伐^きらないこととされているそう。また、山でもものをなくしたときは、男のものを見せて山の神さまにお願いすると必ず出てくるともいわれている。

○ダリ

ダリは山道などを歩く人に憑^つき、ひどい空腹感をもたらすという妖怪^{ようかい}の一種である。この地方でもダリに憑^つかれる話が伝わっており、栃木^{とちのき}竈^{かま}ではこれに憑^つかれるとコケてコケてどうにもなくなると伝わる。村山では、もし憑^つかれたときには手のひらに「米」という字を書いて舐^ねると良いとされた。



伊勢地^{いせじ}

○伊勢地の由来

「いせじ」という名の地名は三重県にもいくつかあり、南伊勢町にも伊勢地^{いせじ}と伊勢路^{いせじ}がある。他県にも同名の地のほか、伊勢田、伊勢畑、伊勢領などの地名もあるという。これらは伊勢神宮に供える作物をつくる土地を表したといわれている。

○シューリさん

伊勢地の元谷の下に、シューリさんを祀^{まつ}った小さな祠^{ほこら}があった。今では天王さんに祀^{まつ}ってシューリ大明神と呼ばれている。

このシューリさんは落^おち武者^{むしや}であったと伝えられる。山を越えてこの地に逃げてきたが、元谷の下ところで死んでしまったので、その場へ祀^{まつ}られた。昔この近くに一軒の家があったが、その家ではシューリさんのカブトを塩入れにしていたという。



河内こうち

○三谷山の龍

河内こうち北方に聳そびえる三谷山の山頂には、古くから龍神さまを祀まつる祠ほくらが鎮座ちんざしている。ここは太古の昔、海底であつたが地殻変動ちかくへんどうが起き、隆起りゅうきして山となった土地であることから、海の守り神として知られる龍神さまが祀られたとされている。

今でも年に二回、山頂の龍王社で神事が執り行われるなど大切にされている山である。山全体が石灰岩でできた最高峰（七八四メートル）の山であり、現在もなお採掘作業が続けられている。

この三谷山の龍は黒龍こくりゅうともいわれており、龍神さまは今でも山と人々の暮らしを見守られている。（河内加藤實氏より聞書）

○陸の龍宮と呼ばれた場所

この地域には古くから龍の棲すむ池と龍を祀まつる社があり、地域の人々により語り継がれてきた伝説がある。特

に飛鳥池（神前浦）、かさらぎ池（奈屋浦）、三谷山（河内）に棲むとされる三つの龍は、それぞれ東、西、北に位置し、そのほぼ中央となる宮山（瑞柏山）の山頂に、地域の氏神である仙宮神社が鎮座している。この山頂までの石段は龍が天空に駆け上る姿にも似るといふ。

また、この地は豊かな自然に恵まれ、風光明媚で温暖。海の幸、山の幸に恵まれており人々が住むのに最適な場所、まさしく桃源郷であるところから、仙宮神社に『仙』の字が使われたそう。この地は人生が楽しく愉快に暮らせる郷であるところから、陸の龍宮といわれている。（河内加藤實氏より聞書）

○海からあがった観音さま

昔、吉津の海辺に小さな村があった。人々は漁をして暮らしていたが、あるとき湾内に大きな一頭のクジラが迷い込んできて騒ぎになった。

迷い込んできたクジラをよく見ると、頭になにやらきらきらと光る小さなものが乗っている。たまたま漁をしていた地元の漁師が「あれは仏像さんだ」と気がつき、すぐさま持っていた網をクジラの頭におかして投げ入れた。

漁師が小さな黄金の仏像をすくいあげると、クジラはみるみるうちに大きな岩



となり、西方の海面が黄金色に染まったと伝えられている。地元の人々は山の麓ふもとに小さな祠を建てて、この観音像を大切にお祀まつりした。

ある日、都みやこから行基ぎょうきという偉いお坊さんが村にやってきた。話を聞くと、聖武天皇しょうむてんのうの命をうけて、大仏建立の淨財を求めて各地を巡る途中にたまたま立ち寄ったのだという。そこでこの仏像を見て驚くと、これは立派な観音像であると話して、この仏像を聖武天皇に献納けんのうすることとなった。

聖武天皇に献納された仏像（十一面観音様）は、奈良の東大寺二月堂に納められたと伝えられており、代わりにいただいた仏像（聖観音様）は、奈津なづの御本尊として地域の人々に親しまれている。

このお寺、山号を金網山、寺名を西方寺という。山号には観音像をすくいあげた『網』、寺名には西の海が黄金色に染まったことから『西』が使われている。また、クジラがなつたとされる岩は、現在では道路の下に埋まってしまつて見ることができない。（河内加藤實氏より聞書）

○延命地蔵えんめいじぞう

河内穀大神に、山肌のもろい通称『グヤマ』と呼ばれている山があった。

グヤマの斜面からはいつもパラパラと小石が落ちてきていたが、ある日突然大きく崩れ落ちたことがあった。近くの道に土砂がなだれ込んできたので通行の妨げとなり、人々はたいへん困ったという。

そこで里人たちは話し合い、協力して土砂を取り除くことにした。作業をしていると、ある人が土砂のなかに何かがあることに気がついた。一体の地蔵尊であった。さっそく人を呼び、みんなで掘り出して山の麓ふもとに祠を建て、大切にお祀りすることにした。

あるとき、病に苦しむ人がこのお地蔵さまにお祈りをしたところ、日増しに病も良くなり、元気で末永く暮らしたという。いつしか人々はこの地蔵尊を延命地蔵えんめいじぞうと呼ぶようになり、長寿にあやかろうと願う人たちがお参りをするようになった。このお地蔵さまは、今も地域の人々の健康と幸せを静かに見守られている。（河内加藤實氏より聞書）



○蘇よみがえりのバクチの木

仙宮神社には、今でも神社の御神木として大切に守り伝えられている木がある。時を経て大きく生育したこの木はバクチの木といい、多羅樹たらじゆともビランジュとも呼ばれている。この木は昔、北天竺きたてんじく（北インド）の遙か遠い国から訪れた、佛哲和尚という一人のお坊さんが持ってきた一本の若木を仙宮神社の境内に植えたことがはじまりとされる。

バクチの木が蘇よみがえりの木とされる所以ゆえんは、毎年一度、幹全体の樹皮がはがれ落ちて新しい樹皮になることからきている。再生または蘇りと呼ばれており、縁起の良い木であるとされ、人生の転機にあつては幸運に恵まれるとも伝えられているそう。（河内 加藤實氏より聞書）

○吉凶なづはま占う奈津浜の三棚神事みたなしんじ

昔々、この地には三棚神事みたなしんじと呼ばれる古くから伝わる特殊神事とくしゅしんじがあった。今ではもう絶えてしまっており、知る人も少なくなってしまうたが、吉凶を占う行事として吉津地区でおこなわれていた神事である。この神事の日、たいへん賑わう祭りのような一日であったという。

旧暦きゅうれきの正月、村人たちは朝早くから仙宮神社せんぐうじんじやに集まり、獅子頭ししがしらの入った唐櫃からひつを担いで揚々ようようと奈津なづの浜辺へと向かった。獅子舞神事の準備が整うと、いよいよ祭りが動き出し、あたりが活気付いたという。

三棚神事みたなしんじの儀式は、まず神職と僧侶がそれぞれ祭壇さいだんにて祝詞のりとと御経おきようを読み上げることから始まる。

祭壇さいだんにはハイの木で組まれ、五段の供え物をした棚が用意されている。獅子舞が堂々と舞うなか、漁業をする者と農業をする者がこの棚を倒すことにより、その年の吉凶を占うのである。

棚を海の方に倒すと大漁になり、山側に倒すと五穀豊穰ごこくほうじよう、農が豊作ほうさくになるとされていた。これらは自然の中で暮らす人々のたしかな思いであり、また純朴じゆんぼくな願いでもあった。（河内加藤實氏より聞書）

○猪ノ目模様入りの石灯笼いのめもようい いしとうろう

仙宮神社の入口参道沿いに、一対の石灯笼いしとうろうが建っている。この灯笼には猪ノ目模様が刻まれており、現代で言うハートの形をしているこの模様は古くから日本に伝わるもので、人との出会いを繋ぎ、良縁に恵まれるといわれる。

この石灯笼は江戸に出て活躍した吉津よしづの人々により寄進されたという。それぞれが故郷を出て江戸で暮らしを立てていくと決心し、熱心に仕事に励んだ。とうとう商売を大成させて立派になってからも、彼らは自分た

ちが生まれ育った地を忘れることはなかった。

明和七年（一七七〇年）、この人たちにより氏神様に家族の健康と商売繁盛、地域の安全を願い建てられた。この石灯籠は一度、大津波で倒壊し流失するも元の地に再建されたと伝えられている。（河内 加藤實氏より聞書）

○河内こうちの山での言い伝え

河内では七人で山小屋に泊まってはならないとされている。どうしても七人で行かねばならないときには人形をつくり、ハチロウとかハチゾウとか名前をつけて持っていくそう。

また、ツノムスビの草履ぞうりをはいていると毒虫に刺されないという言い伝えがある。このほか、山でサルという言葉をいってはならないとか、サクラとツバキははじめに伐きってはならないとか、様々なことが伝わる。

山の神さまの日である七日と、お不動さんの日の二八日は総休みをし、この日に山へ行くと傷をするといわれているため、村人は古くからの言い伝えを守ったという。

東宮とうぐう

○新田開発しんでんかいに夢を託した男

長く続いた江戸時代が終わり、明治という新しい時代がはじまったころ。東宮の屋敷の奥にある蔵の二階には、向学心こうがくしんに燃える若者たちが集まっていた。

手に漢文の本を持ち、「この東宮を立派にするもしないも、みな若者の働きにかかっている。少しの暇でも惜しんで学問をせねばならん」と話をするのは、この屋敷の主人、加藤御郷かとうみさとである。

加藤御郷かとうみさとは松阪で生まれ、幼いころに紀州藩きしゅうはんの武士の家に養子にいった。勉学に熱心に励み、仕事についてからもその性格は変わらず、一生懸命に働いた。

そんな仕事ぶりが認められ、御郷みさとは田丸城の見回り役を命ぜられた。この役を命ぜられてからは、いっそうよく働いて地域の農民のために尽くしたという。そのため、江戸時代が終わってから度会郡各地の戸長こちやう（現在という町長）を任されて、人々のために自分の身を投げ打って働いた。

当時、東宮は新田の開発があまり進んでいなかった。しかしまだまだ発展する可能性のある村だとして、御郷は新田開発の夢をみていた。「田畑は、この村に豊かな恵みを与えてくれる。私は東宮をどこにも負けない立派な村にするために役に立ちたい」と話していたという。

御郷は蔵で若者たちに勉学を教え、彼らが帰ったあとは再び机の前に座って新田開発のための資料を開いた。数年前から御郷は自分の財産を開発のために使い、夜は遅くまで研究を続けていた。

とうとう開発がはじまったが、新田開発は並大抵のものではない。木や草が生い茂る土地を田にするのだから、まず木を切り、その根を掘り起こして草を刈らねばならない。さらに石をすべて取り除き、土を耕し、水もれを防ぐ赤土を敷いた後、田に土を入れるのである。

これらすべてが手仕事でおこなわれ、このとき御郷の教えを受けた若者たちが村人の先頭に立って働いたと伝えられている。そして御郷たちの熱意が実り、ついに新田の完成も間近に迫りつつあった。

ある日、御郷は朝早く起き出して、東宮川沿いの奥山の方に向かった。しばらく歩き、一帯に新田が広がる場所についた。静まりかえったなかで空が明るくなり、整然と並んだ新田がはつきりと姿を現すと、御郷は新田の美しさに感動した。



これまでの苦勞を思い出しながらも、人と人が力を合わせれば、なんと素晴らしいことができることかと感心したという。私の一生は本当に幸せであったと、静かに手を合わせた。

それからしばらくして、ついに新田は完成したが、その半年後に御郷は静かに息をひきとった。明治一五年（一八八二年）、六二歳であった。

村人たちは深い悲しみのなかで御郷の葬儀を進めていったが、通夜の夜に野見坂峠を越えてきた一群があった。度会郡川上村の人々であった。一之瀬谷いちのせたににあるこの村は、暮らしに困り果てたとき、御郷によって救われたという。

川上村の人々の話を聞いてあらためて御郷の人柄に感動した人々は、夜通して火を焚きながら御郷の死を惜しんだ。

○江戸の大商人 河村瑞賢かわむらざいけん

瑞賢ずいけんは元和四年げんな（一六一八年）、東宮とうぐうに生まれた。後に江戸時代の大商人として名を残すことになる人である。瑞賢が子どものころに寺子屋で読み書きを習っていたとき、和尚が子どもたちに「もし、もう一つ目をやる

といったら、お前たちはどこにほしいか」と問うた。子どもたちは、背中に目をつけて背後を見たいと言ったり、頭に目を持てば頭上が見られると口々に答えた。

そんななか、ただ一人瑞賢だけが「指先に目がほしい」と言ったという。和尚が理由を尋ねると、土の中に指を入れれば土中が覗^{のぞ}け、水の中に入れば水中を見ることができると答えた。これを聞いた和尚は、この子は只者ではない、将来大成するだろうと予感したという。

また、瑞賢に将来を拓^{ひら}く力があると感じていたのは、瑞賢の父母も同様であった。瑞賢は長男であり、当時長男は家を継ぎ地元で暮らしたが、両親はこの子は必ず大成する器であるからここに残してはだめだと決心し、外へと送りだした。このようにして瑞賢は一三歳で江戸に出立^{しゅったつ}することになる。

東宮を出て一〇日ほどが経ち、ようやく江戸についたものの、江戸には親戚も知り合いもおらず、これといって良い仕事につけなかった。ようやくありつけたのは車夫^{しゃふ}の仕事で、このままでは何も成すことができないと悩み焦りを抱いた瑞賢は、上方^{かみがた}（京都や大阪）へ行ってやり直そうと思い立った。

上方へ向かう途中、小田原^{おだわら}まで来て小さな宿屋で休もうとしたところ、瑞賢は偶然同じ部屋に泊まることになった年老いた男に話しかけられた。

どこへ行かれる、と聞かれた瑞賢は、「上方へ」と答え、自分が東宮を出てからの江戸での生活ぶりを話すと、「江戸で辛抱できなかった者が、どうして上方で辛抱できるというのか」と叱咤^{しった}されたという。そして、お前

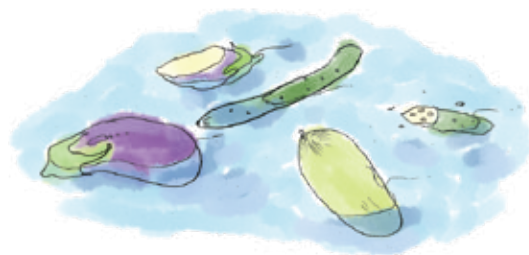
は立身出世する相をしている。もう一度死んだつもりで江戸でやり直しなさいと、力強い激励を受けた。瑞賢は老翁の言葉に自らの考えの甘さを反省し、厚くお礼を言うと、夜が明けるのを待たずに江戸へ立ち返った。

商人の道へ

瑞賢が江戸に戻る途中、品川までやってきたのはちょうど盆の終わり頃であった。瑞賢は品川の海辺を見ると、お供え物に使われたナスやウリ、キュウリなどがたくさん浮いているのを見つけ、これを漬物にして売ることを思いついた。

瑞賢は波打ち際まで走ってそれらを拾い集めはじめたが、一人ではとても全部を拾いきれない。そこであたりを見まわすと街道の松の木の下陰にいる人たちを見つけ、彼らにお金を与えて手伝うように頼んだ。街道を行き交う人々は、瑞賢たちが流れているナスやウリなどを拾っている様子を不思議におもい、眺めていたという。

こうしてできた漬物は味が良いと大変評判になり、おもしろいほど売れて瑞賢は江戸に出て以来はじめてまとまったお金を手に入れることができた。



その後も商売は繁盛し、二〇歳を過ぎたころ、瑞賢は土木工事をしていた役人と知り合いになった。その役人から、人手が集まらず工事が遅れがちになって困っているの、人夫頭（人夫とは主に力仕事をする労働者

のこと。人夫頭はその人夫達を取りまとめる人）をやってみないかと頼まれ、瑞賢はこれを引き受けることにした。

瑞賢は仕事を進めていくうえで、なによりもまず現場で働く人たちのやる気を出させることが大切であると考えた。そのためには上に立つものとしての鋭い観察眼と決断力を備える必要があり、この力を十分に身につけようと努めた。瑞賢はもともと小さいことにこだわらず、いざという時には思い切ったことをする性格であり、そこへ商人としての腰の低さも相まって、役人や人夫たちから慕われていった。

こうして瑞賢は人夫達のやる気を出させることに成功し、効率の良いやり方を次々に実行していくので、瑞賢が引き受けた工事は予定よりも早く終えることができたという。

その後も頼まれた仕事を確実にやり遂げていくので、少しずつ周囲からも仕事ぶりを認められるようになった。そうして貯えもできたころ、瑞賢は材木屋を開くことにした。

「火事と喧嘩は江戸の華」と呼ばれるほど当時の江戸では毎日のように火事が起き、そのたびに新しい家が建てられた。そのことから材木屋が儲かると判断したのである。

明暦の大火

そして明暦三年（一六五七年）、明暦の大火と呼ばれる大きな火事が起こった。火は強い風にあおられて江戸中に広がり、二日間も燃え続けたという。

そのとき瑞賢は、自分の家が猛火に迫られているのをかえりみず、貯えたお金をすべて持って木曾に向かった。木曾は有名な木材の生産地であり、なかでも「木曾ひのき」の名は全国に知れ渡っていた。

瑞賢は木曾に着いて一軒の宿屋に泊まった際、門前で無邪気に遊んでいる宿の子を見つけ、あることを思いついた。瑞賢は懐から小判を三枚取り出すと小刀で穴を空け、紙のこよりを通しておもちゃをつくった。それをちやらちやと振りながら子どもに与えたのである。おもちゃをもらった子どもは小判とは知らず、振るといい音がするので喜んで家の中かけこんでいった。

それで驚いたのが宿屋の主人である。そのころ小判は大人でも簡単に手に入れられなかった大金であったので、宿屋の主人は信じられない思いだった。そうして「瑞賢は大金持ちである」という噂があったという間に木曾の村々に広がっていったという。

この噂がさいわいし、瑞賢はほとんど買い占めるようにして材木を手に入れることができた。この材木は江戸で高く売れて数千両というとてもない儲けを出し、江戸でも有数の大商人として知られることとなった。また、この出来事以降、幕府から仕事を請け負うほどの信用を得ることとなったのである。江戸に帰ったときには既に自宅は焼けてしまっていたが、瑞賢は直ちに建築請負業をはじめた。

海運史上に残る大事業

寛文一〇年（一六七〇年）、江戸の人口が増えて米不足が問題になっていた幕府は、東北地方の米を江戸に

運ぶ仕事を瑞賢に命じた。

当時、米は船か大八車^{だいはちくるま}で運ぶ方法が主であったが、船では嵐にあってたり座礁^{ざしょう}するなどという危険があり、大八車で運ぶとなると時間がかかりすぎるということが問題であった。

そこで瑞賢は船で運ぶ方法が最も効率が良いと判断し、さっそく腕の良い船頭^{せんどう}を集めて安全な航路^{こうろ}を見出す調査にとりかかった。綿密^{めんみつ}な調査に瑞賢たちは大変苦勞したが、とうとう江戸と東北間を無事に往復することができる航路を発見した。太平洋側を通るこの航路は、東廻り航路^{ひがしまわ}と呼ばれた。

また、その二年後、今度は東北地方の日本海側から江戸に米を運ぶ航路の調査に乗り出すこととなった。瑞賢は遭難が続いている津軽海峡^{つがるかいきょう}を避けることにし、遠回りでも安全で確実に航行できる新しい航路、西廻り航路^{にしまわ}を発見した。このとき日本海の航路上、唯一の拠点となった酒田^{さかた}（山形県酒田市）は大繁栄をみせたという。

この二つの航路の発見は、東北地方の米を江戸に運ぶだけでなく、日本中の品物を各地に運ぶことができるようになったことから、人々の生活が少しずつ変化していく大きな要因になったといわれている。

このころには瑞賢の商人としての評判は全国に広がり、各地の大名はその才能を見込んで、先を争うように



して瑞賢のもとに様々な仕事を頼みにくるようになった。そのうちの 하나가、川の洪水を防ぐための治水工事であった。

瑞賢が生まれ育った東宮にある東宮川は何度も洪水を起こし、家が押し流されたり、せっかく実った田んぼが水に浸かるということが多々あったという。そのたびに村の人々が恐ろしい目にあってきたことから、瑞賢は川の流域に住む人々を守るこの仕事を喜んで引き受けた。

特に大工事であったのは、大阪の淀川の工事であった。瑞賢は淀川をくまなく調査し、人の手によって新しくもう一つの川を造ることを考え出した。たとえ淀川の堤防を高く積み上げても、この川の地形ではとても持ちこたえることができないとわかったからである。

工事は大変難航したが、この工事をやり遂げなければ後の世にも大きな被害が出ると確信していた瑞賢は、率先して工事現場に出向き、働く人々を励まし、力づけたと言い伝えられている。瑞賢は洪水の苦しみから解放された人々の喜びに満ちた生活を夢見ていた。

こうして四年の歳月をかけて切り開かれたのが、今も残る安治川である。その後も岐阜県の長良川、中津川などの治水工事もおこない、安治川と同様に成功を収めることとなる。

このほかにも港を造ったり、新田や銀山の開発などにも仕事を広げ、瑞賢は大商人であるだけでなく、有能な土木家としても認められるようになっていった。

大商人河村瑞賢

そして元禄一〇年（一六九七年）、異例の出来事が起こった。時の將軍、徳川綱吉とくがわつなよしに謁見えっけんすることとなったのである。

江戸時代は武士が世の中を支配し、農民や町民は身分が低かった。生まれが貧しい百姓の家であった瑞賢が、武士の最高位である將軍に謁見することは大変珍しく、世間を賑わせた。

さらにその翌年には旗本はたもとに加えられることとなる。旗本は武士のなかでも特に功績をあげたものだけが与えられる身分であり、そのような武士の仲間入りができたことは、当時としては最高の出世であった。

瑞賢がこのように大成したことには、瑞賢を取り巻く人間関係も大いに影響している。瑞賢には素晴らしい才能と機知きちとがあつたが、さらに周りには力になってくれる人たちがいた。

なかでも、江戸時代の代表的な学者である新井白石あらいはくせきとは深い親交があり、お互いに影響を与えあつたという。新井白石は瑞賢の功績を後世に伝えるため、二冊の本を書き表している。そこには「天下に並ぶ者が不在富商」と賞賛されていたという。

瑞賢は一三歳で東宮を出て以来、父母や故郷のことを一時も忘れることはなかった。

江戸へ旅立つときに神社や寺にお参りし、旅の無事や家族の無事、いつかきつと自分は立派な人になりますと神仏の前にぬかずいた（額ひたいが地面につくほど深く拝んだ）という。いつか成功したならば、故郷のために恩

返しをしたいと心に決めていた。

そして江戸の大火で大きく成功したとき、前途を祈った神仏の御加護にお礼をするため、巨大な石の鳥居とりいを東宮の八柱神社へ奉納ほうのうした。

また、父母の墓を東宮の寺に建て、大般若経だいはんによきよう六〇〇巻を奉納。さらには東宮や奈屋浦なやうらで飢饉ききんや火事がおこった際、多額の資金を援助したと伝えられている。石の鳥居や大般若経は今でも町の文化財として残っている。

元禄げんろく一二年（一六九九年）、瑞賢は八二歳でこの世を去った。現在も安治川のほとりには功績を称える碑が残っている。東宮や酒田市には瑞賢の像が建ち、三〇〇年以上経った今でも人々からは瑞賢さんの愛称で親しまれている。

○瑞賢ずいけんさんの逸話いつわ

東宮出身の大商人、河村瑞賢かわむらずいけんは江戸に出て数々の功績をあげた。仕事を頼めば人に慕したわれ機知きちに富み、関わる者皆がやる気を出して仕事に取り組んだという。そんな「頼みがいのある男」として人々に知られた瑞賢さんには多くの逸話がある。



①金は天下の回り物

瑞賢は他人が仕事で成功すると自分のことのように喜んで、その人を招いて酒盛りをした。ある人が、なぜ他人のことであるのに、そのようなことをするのかと聞いたところ、次のように答えたという。

「幕府や大名が金蔵にしまっている金銀は、土のなかに埋もれているのと同じだ。その金を町中にはらまければ、人夫にいたるまで多くの人々が、その金にあやかることができる。そうすれば金銀が天下を駆け巡ることになり、町の景気は良くなるだろう。そうすれば自分たちも利益を得ることになる。一人の人間の利益のみをどうこう言うことは、せまい」

②増上寺の鐘

現在、東京都港区にある増上寺の鐘は、四代将軍徳川家綱の時までに七回もひび割れて困っていた。そこでなんとか丈夫な合金の鐘をつくったが、その鐘は大変重く、ついにはその重みで吊ってある金具が折れて地面に落ちてしまった。

そこで鐘を吊り上げる工事をおこなうことになり、請負入札がはじまった。どの業者も驚くほどの高値であるなか、ただ一人瑞賢の入札は他の半分にもならない安値であったので、ただちにその工事を落札したという。このとき他の者たちは「見ろ、瑞賢のやつ必ず大損するに違いない」と笑ったという。

当日、見物人が見守るなか、瑞賢は二、三〇人の人夫にんぷをつれて増上寺にやってきた。そして寺の門前にあった米屋に、米をたくさん買うから俵たわらのまま増上寺の鐘楼しょうろうの前に持つてくるようにと頼んだ。

次々と米屋が俵を運びこんでくると、瑞賢は鐘を俵のそばに並べさせ、俵の上に鐘をころばせた。また俵が運びこまれるとさらにその上に積み、もう一度鐘をころばせて上へ上へとあげていった。なだらかな俵の山が出来上がるようだった。

そうしてちょうどよい高さになったとき、鐘につり金を引っ掛け、今度は積み上げた俵を取りのけていったのである。そこには見事に吊り上げられた鐘があった。

さて、残った俵については米屋に一割引きで売り戻すとふれると、先ほどの米屋が皆喜んで持つて行ったという。周りにいた見物人をあつと驚かせた出来事であった。

③ 鬼瓦おにがわらのさしかえ

あるとき、浅草の観音堂かんのんどうの鬼瓦おにがわらが台風で落ちて碎けてしまったので、これをさしかえることになった。さっそく入札がはじまったが、屋根が高いうえに大きくて重い鬼瓦であったから、足場を組み立てる費用がかさむと見て、どの業者も高く見積もった。

ところが瑞賢の入札だけは他よりぐっと安かったのでたちまち落札した。周りの人たちは瑞賢があまりにも

安値で落札したので、どのように工事をするのか不思議に思ったという。この入札は町のかわら板ばんに書かれるほど話題になり、人々の注目を浴びることとなった。

さて、いよいよ工事の日である。町の人たちは朝早くから見物するために大勢集まっていた。観音堂の前に瑞賢が現れると、風の方角を見るや、突然風たこをあげはじめた。これはおかしなことになったと見物人たちは見守っていた。

風がほどよく上がって観音堂の屋根を越えたとき、瑞賢は急に糸を伸ばして風を狂わせたので、たちまち屋根の向こう側に落ちてしまった。そうしていよいよ見物人たちはざわめいた。なかには「瓦かわらをはやくさしかえよ」との声もする。

風が落ちると瑞賢はすました顔で、持っていた糸の端に太い糸を繋いで向こう側へ引っ張らせた。そのようにして次々と太い糸を繋いで向こう側へ引き、しまいには縄梯子なわばしを二筋ふたすじ繋いでしまった。

この縄梯子が向こうに届くと、お堂の前後に頑丈な杭くいを打ってしっかりと固定し、下のほうから板を縛りつけて段々と頑丈な梯子をつくっていった。

とうとう梯子が屋根まで届くと、人夫たちは一〇人ばかり梯子はしごに登っていった。今度は長くて広い板を屋根にあげると、屋根に横たわっている梯子と瓦の間に板を挟んで、重みを支えられる足場をつくった。ここまで

仕事が進むと、やっと見物人たちは納得したという。

あとは鬼瓦を上から引き上げて据えつけると、必要な道具は全部引き上げてしまった。材木の足場を組まないで工事を成功させたのである。それも一日で済ませてしまうという早さであった。

この工事が終わったとき、見物人たちは瑞賢の頭の良さと要領の良さに驚き、褒めたたえた。そして「あの人はなんでもできる」という印象が町の人や幕府の役人に広まり、困ったことがあれば瑞賢に知恵を借りようとする人が増えていったという。

奈屋浦なやうら

○かさがらぎ池の龍

昔々、かさがらぎ池で仕事をしていた海女あまが、この池の深いところに獲物が多くいるので、何度も潜っては貝を採っていた。



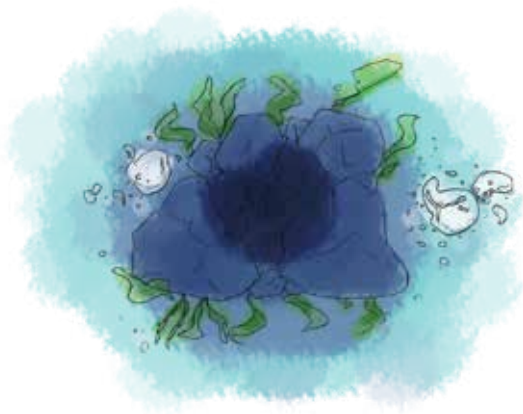
あるとき、池の最も深いあたりに海藻に覆われた大きな穴があるのを見つけた。異様な光景になんだろうと不思議に思いつつも、あまりに貝がたくさんいるので夢中で潜り、仕事を続けていた。すると、先ほどみた穴から突然、するどくてきらきらと光る大きな目の龍が二匹飛び出してきた。青色と白色の二匹の龍は水面へと泳ぎ出し、海女は腰を抜かさんばかりにびっくりして、やつとのおもいで陸にのがれた。

恐るおそる池を眺めてみると、二匹の龍が舞うが如く、踊るように水を切って泳いでいるのが見えた。これはえらいことだと海女は仕事をおいて急いで村に帰り、このことを村の人々に話した。

村中、海女の話で沸いた。「どちらかの龍はかさが池の龍で、もう一方は吉津の飛鳥池に棲む龍に違いない」「あの二匹の龍はつがい（夫婦）なのであろう」とも話し合った。古老の話によると、この地には古い時代より龍がいると言い伝えられており、「飛鳥池より龍が渡ってくる」とも言われていたそう。海女がみた池の中央の大きな穴は、龍穴だったのである。

ある日、大地震があつて山が崩れ、龍の出入りする穴がふさがれてしまった。村の古老が、龍は神の霊を宿すと言い、ふさがれた穴のところへ石垣を積み、龍の聖域を汚さないようにと弁財天をお祀りしたのであった。

（河内加藤實氏より聞書）



○奈屋浦のはじまり

一六一〇年頃、東宮村の庄屋であった河村太兵衛尉政良が紀州田辺江川浦（現在の和歌山県田辺市）から五人の漁師を呼び寄せ、海辺に納屋なやを建てて住まわせた。彼らに漁業を営ませたところ、だんだん漁が盛んになって村が栄え、ついには東宮村から独立した。その際に村名を奈屋浦なやうらと改めたそう。漁師たちの海での服装は広袖ひろそでにフンドシー丁であった。寒いときにはアワセを着たという。

奈屋浦には舟に鏡をつんではいけないとか、舟に女を一人で乗せてはならず、どうしても乗らねばならないときには人形を持っていくといった言い伝えがある。また、舟の上で男女が交わることは一番悪いこととされ、禁忌きんぎであった。

○こうもり穴小輪と、くじら島

安永八年（一七七九年）十月十七日、小輪こわの奥まった小島に、ごんどう鯨くじらが馳はせ上がった。

近くで漁をしていた方座浦ほうざうらの漁師はさっそく奈屋浦へ知らせに来てくれたが、その間に賛浦のカツオ船が鯨を見つけ、銚もりを打って肉を切り込み、船に積み込んでいた。現場へ駆けつけた奈屋浦の漁師たちは「奈屋浦領

内へ馳せ上がった鯨だから奈屋浦の鯨だ」と口論となり話し合った結果、奈屋浦へ運ぶことになった。

四艘よんそうのカツオ船をモツソウ（並べて組み合す）に組み、鯨をつり上げ曳ひいていく途中に、神前浦のカツオ船が数艘すうそう、沖合より駆けつけて来て「小輪は神前の領内だ」と、三ヶ浦で鯨の奪い合いの大げんかが始まった。

しまいには奈屋浦の漁師達に怪我人も出る始末、やむなく鯨を「戸かべ出し」の海底に沈めて慥たしか柄大庄屋殿に「乍おそれながら恐が奉いあげたてまつり願そうろう上こうじょう候こう口上」と訴え裁定をお願いした。

翌日、大庄屋は三ヶ浦の庄屋しやうやを呼び、「鯨はいずれも浦へ入りて、一番銚いちばんもりを打った船の鯨である。一番銚の船の浦へ曳いて行くのは定法じやうぽう」と裁定され、贅浦カツオ船の鯨となったが「『こうもり穴小輪』については、むかしより奈屋浦の領内とされている」と神前浦の漁師たちを叱責しっせきした。現在はこの島を、『くじら島』と呼んでいる。（参考『奈屋浦四百年の歩み』）

○えびすさん・弁天さん

奈屋浦の始まりは、慶長十四年（一六〇九年）河村太兵衛尉政良かわむらたひょうえのじやうまさよしが、紀州田辺江川浦きしゅうたなべえがわうらより四、五人の漁師を呼び寄せ、この浦海で魚の試し捕りをさせたのが、奈屋浦の始まりと伝えられている。

この四、五人の漁師達が家族共々この浦浜に住みつき、自分たちの新天地を創るんだと、日夜懸命に漁稼ぎ

に励んでいた。しかし、故郷を捨て縁者、知人のいない未知の土地で多くの不安と寂しさを神仏にすがり心身を癒そうとする思いは、人皆誰もが持ち合わせている心情だろう。

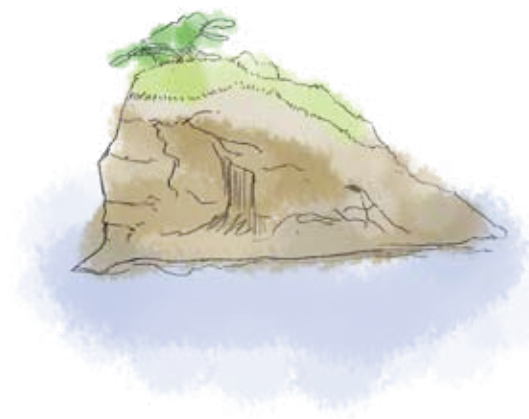
漁師達はいつも出漁する時には浦の守り神である弁天様に船上より洗米をお供えし、御神酒をそそぎ、海上の安全と大漁を祈願して沖だしをする。漁を終えて港に帰ると、まず獲ってきた魚を「えびす神社」にお供えして、今日の漁事の無事と大漁を感謝し、御礼のお参りをするのが慣わしであった。

「弁天様・えびす神社」は、漁師たちがこの浦浜に住みつき漁を始めた時より今の地所に建立されていた。漁師たちにとっては一番大切な漁神様であった。

（参考『奈屋浦四百年の歩み』）

○支毘の神さま

慶応三年（一八六七年）、国内はますます混沌とし、全国至るところで農民一揆が起こっていた。奈屋浦の人たちも元治年度（一八六四年）より続く世情不安と、凶作による飢餓の苦境と闘いながら、必死に生活する日々が続いていた。そしてこの年の三月三日、奈屋浦に未だかつてない大きな奇跡が起こった。



ボラ網漁の出初めの日、「ひら床」の荒見（ボラの見張り）は一年ぶりに見張り小屋に入り、まず神棚を丁寧（ていねい）に洗い、真塩で清めて洗米を供え、御神酒（おみき）を注ぎ、静かに頭をたれ、柏手（かしわて）をうち、今年のボラ網漁の操業安全と豊漁を祈願した。清々しい気分で小屋の窓からまだ薄暗い「中の島」を見渡した。

その目に飛び込んできたのはシャチに追われた支毘（しび）（マグロ）の大群であった。「中の島」から「崖の下」の「三ツ石」までの海面が一段と盛り上がり、水しぶきをあげて「かえりの浜」へ逃げ込んでくる光景であった。びっくり仰天（ぎょうてん）とはこのような時のことだろう。さっそくホラ貝を口に当て吹き鳴らそうとしたが、いつもはよく鳴るホラ貝も口がこわばり、まったく鳴らない。

精いっぱい大声を張り上げて「エビス崎」の荒見と「切戸」の荒見を呼び寄せた。何事ならんと、すっ飛んできた二人も一瞬目を疑った。未だかつて見たことのない海面の光景、「三ツ石」と「中の島」の間、一面にもうもうとシブキを上げ逃げ惑う支毘の大群である。

「早（はや）うボラ網船団（はなぶねだん）を呼ぶんだ」と無我夢中でホラ貝を吹き鳴らして菅笠（すががさ）（船団を呼んだり網を張るときに使用する笠）を破れんばかりに振り回し、浦浜で待機中のボラ網船団へ連絡、出動を要請した。

荒見たちの様子がいつもと違って感じるのを感じとった庄屋儀右衛門（しょうやぎえもん）は、肝煎藤次郎（きまいるとうじろう）・組頭喜平治（くみがしらきへいじ）・長兵衛・善助・七助の役人たちと、大船（大網を積む船）に乗り込み、漁場へ漕ぎつけた。

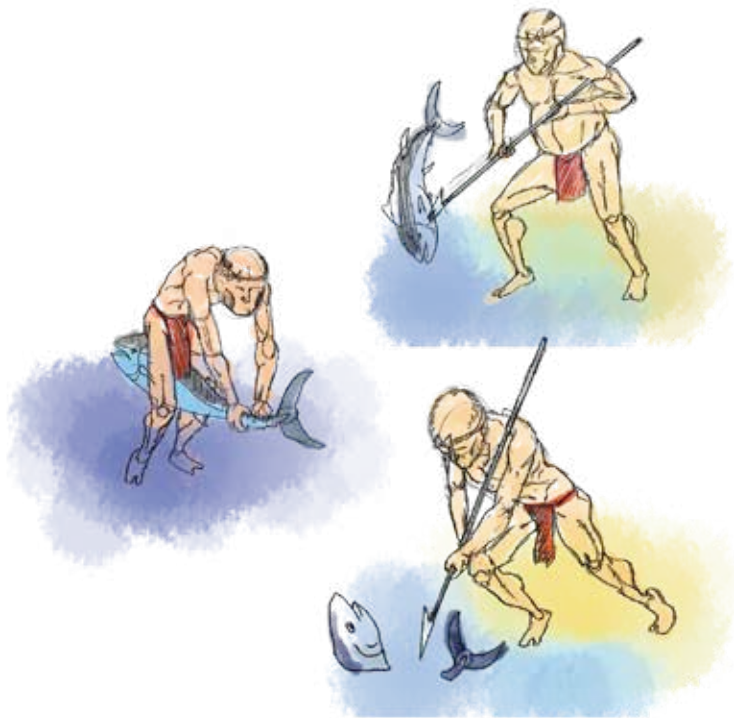
目の前の支毘の大群には漁師たちも度肝をぬかれ、庄屋儀右衛門は「よしやーこの支毘一本残らずとってみ

せるぞ」と組頭たちにハッパを掛けたが、奈屋浦の持ち網だけではとても浦口を塞ぎきることはできないと判断し、さっそく組頭たちに指示し、大網を持つ神前浦に応援を求めた。

神前の漁師たちも早々と応援に駆けつけてくれた。これにより支毘の大群を「かえりの浜、いきての浜」に締め切ることに成功し、支毘は袋のネズミとしたが、捕獲漁事はまた大変で一刻もはやく「とり網」（小捕りをする網）を造らなければならない。引き揚げ用の手カギもいる。仲買人も呼ばなければならない。運搬船の手配など、肝煎藤次郎はてんでこまいの忙しさだった。

地下中総出の捕獲作業である。炊き出しも大変であり、十歳以上の男子・婦女子に至るまで村で働ける人、全員の出勤であった。支毘の捕獲に「いきての浜・かえりの浜」はまるで戦場と化したのであった。

「嘗かつて謂いう未み曾ぞう有の之き奇事也」と供養塔に刻しているように、奈屋浦創設以来の一大奇跡が起こったのである。飢えに苦しみ餓死寸前の漁人たちは、力がなく支毘と一対一では海に引き込まれる。手カギの後にシュロ縄をくくりつけて二、三人がかりで浜に引き揚げるのである。



力をつけるのに大樽に切り込んだシビのナマス（刺身）を頬張り、寒さ凌ぎに樽酒を飲み、狂喜乱舞きょうきらんぶの捕獲作業は十一日まで続いた。捕り揚げた支毘は全部で三千六百十四本。浜は支毘の血で真っ赤に染まり、「いきて・かえりの浜」は、戦浜いくさはまとも呼ばれたのである。

それから十三年後の明治十三年（一八八〇年）一月三十日。奈屋浦にマグロ漁事用の大網ができあがり、いつマグロが浦に入って来ても大丈夫だと浦人たちは待ちわびていた。

そしてついに、再び突如としてマグロの大群が現れたと「ひら島」沖で漁をしていた四人の漁師が発見し、早速浦人に知らせに来た。ボラ網漁の漁期ではなく、不意をつかれたが、戸長実蔵はただちに村中の漁師を動員し、新しく出来上がった網を大船に積み込み出動した。

このとき七日間にわたって捕り揚げた数は二千三百本余り。見事、慶応時の経験を活かし「いきての浜・かえりの浜」にマグロを追いつみ立てることに成功したのであった。

この出来事により浦人達は支毘のおかげで飢餓の苦境から救われ、村創設以来初めて豊かな生活を得ることができた。最初の支毘の大群を迎えた翌年二月、支毘に感謝して霊の冥福めいふくを祈願するため、支毘大命神しびだいみょうじんと刻した供養塔くようとうを建てた。一般的には「だいみょうじん」は大明神と書くが、餓死寸前の浦人たちの命を救ってくれた神様であるとして、「大命神」と刻したのであった。現在に至っても奈屋浦の人たちは、この供養塔を「支

毘の神様」と崇めている。(参考『奈屋浦 四百年の歩み』)

贅浦 にえうら

○ソラガミサン

天狗^{てんぐ}のことをソラガミサンと呼ぶ。この言葉は昔、他所から来た船乗りが伝えた言葉だといわれている。ソラガミサンが空を飛ぶときはヒューヒューという音が聞こえるという。



たしからうら
慥柄浦

○いなりしや稻荷社の神霊

慥柄浦の宇久良うぐら、現在の郵便局裏手には、古い時代から稻荷社いなりしやがあり、祭神さいじんとして三狐神みけつのかみが祀まつられている。神霊は青色の円石まるいしであったと古老の話である。そこは倭姫命やまとひめのみことが天照大神の鎮座地ちんざちを求める途中に入座した場所といわれ、宇久良宮として祀まつられている。

また、古代の鵜倉神戸うぐらかんべと慥柄神戸たしからかんべは、南島地方を代表する神領の双壁そうへきであったといわれている。

○しんそん新村の創始者

今から三〇〇年以上前に、中西彦右衛門正直なかにしひこえもんまさなおという人がいた。神原地区かんばらち慥柄浦たしからうら一帯の地主である。

彼は見渡す限りの雑木林ぞうきばやしとなっていた栗木広くりきひろ（現在の志摩市磯部町）の荒地を見て、「こんなに広い土地が荒れたままであるとは、もったいない話だ」と思っていた。元禄げんろく一四年（一七〇一年）、彦右衛門ひこえもんが五三歳の春のことである。

当時、故郷ふるさとの慥柄には貧しい生活をしいられている人々がたくさんいた。なかでも悩みの種は、その家の二男じなん、三男さんなんになる人たちのことだった。兄弟が十人という家は珍しくなく、長男以外の子どもは財産をわけてもらうこともなければ、家業を継ぐこともなかった。彦右衛門ひこえもんは、なんとか彼らに仕事や住む土地をあたえてやりたいといつも考えていた。

あるとき、彦右衛門は河村瑞賢先生かわむらさずいけんの話进行思い出した。河村瑞賢は東宮出身の大商人であり土木家としても有名だった人である。

瑞賢先生はこのとき既にこの世の人ではなくなっていたが、江戸で大きな商売を成功させ、幕府とともに河川工事などの大工事を立派にこなしたという彼には、きっと弟子がいるはずだと信じてさっそく江戸にたつ準備をした。

ようやく江戸に着いた彦右衛門は、ついに瑞賢先生の弟子を探し出した。教えを乞うために故郷の事情を詳しく話したところ、その熱意に感心した一人に、水路や田畑の作り方を教えてもらうことができた。

「谷を探してその近くに池を掘り、水を引いて湧き水とともに大きな池をつくりなさい。そこから水路を作れば荒地を田畑に変えることができるでしょう」一通りのことを教えてもらうと、彦右衛門は大急ぎで栗木広に向かった。

彦右衛門は来る日も来る日も六呂瀬^{ろくろせ}の谷に入り、水のたまりやすい場所を調べた。ある程度の地形をつかむと、ひとたび故郷慥柄に帰ることにした。

彦右衛門は二男三男の若者を自宅に集め、自身の考えることを熱心に話したが、村の若者たちにはなかなか響かなかった。「そんな夢のような話があるわけない」「これまであの土地に手をつけて、うまくいった者はおらん」と相手にされない。それでも彦右衛門は諦めず、仕事のきりがつくと慥柄に戻り、若者たちに呼びかけるということ続けた。

彦右衛門が水源の調査を始めて二か月が経ったころである。ついに六呂瀬の谷のどこに最も水がたまるかをつきとめた彼は、この大事業を成し遂げるには、もはや藩^{はん}の力を借りるほかないと考えた。

彦右衛門は瑞賢先生の弟子に教わったとおりに綿密^{めんみつ}な計画書を書き上げ、そして田丸^{いぎやうしよ}の奉行所にこの計画書を差し出すと、藩の役人たちはこの計画書にたいそう驚いて瞬^{またた}く間に噂が広まった。彦右衛門には栗木広の開墾^{かいこん}許可がおりただけでなく、工事費用として金四百両が貸し与えられることとなった。

「今度こそは慥柄の若い衆を納得させなければ」と決意してこの話を持って帰ると、とうとう治作^{じさく}、茂平^{もへい}、八吉^{やきち}の三人が栗木広へ行くことを承知したという。

彼らはまず荒れた栗木広の地に頑丈な飯場^{はんば}を建てて住み、寝食をともにしながら工事にとりかかった。彦右

衛門の決意は固く、慥柄で二代続いた地士の私財いっさいをこれに投げ打つ覚悟であった。

六呂瀬の水のたまる場所に池を掘る作業は、朝から晩まで続いた。冬も近いある日のこと、治作が大声で叫んだかと思うと、みるみるうちに湧き水が掘った大穴を満たしていった。ついに水源を掘り当てた彦右衛門たちは泣いて喜んだ。

ようやく谷と池とを結ぶ水路の工事が始まった。今こそ大勢の人手を集めるときであった。再び彦右衛門たちは村へ戻って若い衆に声をかけると、みんなの目が輝いた。彦右衛門の語ることはもはや夢物語ではなくなり、さらに治作や茂平、八吉のひたむきな姿が彼らを動かしたのである。

彦右衛門と行動をともにする若者は増え、全部で一七人になった。飯場も新たに建て直して池を掘り、水を引く水路工事は急に活気を帯びて驚くべき早さで工事は進んだ。このようにして、あと三月もすれば正月という年の暮れ、谷の近くに周囲

が半里（約二キロメートル）もある大池ができあがり、若者たちはこの完成を心から喜んだ。

それから一七人の若者たちは死に物狂いで働いた。そうして四月、荒れ果てた栗木広の地に待望の水がそそがれ、どっと歓声があがった。飛び上がって手を叩く者や抱き合って涙を流す者もいた。その夜は全員で酒を酌み交わし、これまでの苦労や明日から始まる開墾かいこんの話に力が入った。若者たちは一七人衆と呼ばれるよう



になった。

元禄^{げんろく}一五年（一七〇二年）、彼らの開いた田地三〇反^{たん}に、ついに稲の苗が植えられた。『彦右衛門、栗木広の開墾^{かいこん}に成功す』のうわさは付近一帯に広がり、志摩地方一帯の若い衆がどんどん集まってきた。彦右衛門は彼らにも土地を与え、家を建ててやり、農機具まで貸し与えたという。

時がたち、一七人衆は彦右衛門のあとを任されて今や堂々たる世話役にまで成長した。あちこちに新しい家々がたち並び、赤ん坊の元気な泣き声や家族の笑い声が聞こえる、活気あふれる村ができあがった。

栗木広の人々は、村を開いた恩人として毎年彦右衛門の命日には供養をおこなっているそう。今でも供養塔があり、花がたむけられているという。

○大庄屋 向井家

慥柄浦の向井家は周辺の村々の庄屋^{しょうや}をまとめる大庄屋を代々つとめる名家で、その範囲は現在の五カ所浦や磯部町の一部、度会町の中村や脇出まで及んだという。合わせて五〇あまりの村々をまとめあげ、これを慥柄^{たしから}組と呼んでいた。この慥柄組を江戸時代、天保年間^{てんぽう}に束ねていたのが向井元庵^{むかいげんあん}であった。

元庵^{げんあん}は幼少のころから学問が好きで、伊勢や松阪の有名な学者や先生について学び、その間に医学の知識もつけて、病にかかった村人を診ることもあったという。

元庵が三五歳になったころ、天保^{てんぽう}の大飢饉^{だいききん}が起きた。夏になっても肌寒く、綿入れ^{わたい}の着物を着なければならぬ天候が続いたり、三カ月の間に五〇日も雨が降るといった状態であった。春に植えた稲などは穂も出ず、漁業もまったくふるわずに、とうとう村の食糧も尽きて幼い子どもや年寄りなどは次から次へと弱って死んでいく者さえ出てきた。

大庄屋という立場と責任から、各村々の庄屋を集めては何か良い方策はないものかと夜遅くまで知恵をしぼったが、良い考えは出なかった。元庵はなんとか槌柄組の人々を救いたいという気持ちから、毎晩寝付けない日々を送っていた。

ある日、元庵は客が帰ったあと、床の間にかけてあった掛け軸をぼんやりと眺めていた。そしてある考えをひらめき、「これしかない」という思いから全身が熱くなるのを感じた。自らの家に代々伝わっている高価な絵や着物、骨董品^{こっとうひん}を売って、その金で米を買うというのである。

さっそくこの地方をおさめていた和歌山藩^{わかやまはん}に許しを得ようと願い出たが、初めは聞き届けられなかった。それでも諦めず説得を続け、ついに和歌山藩は元庵の村人を思う気持ちにうたれて許可を出したという。

和歌山藩から許可が出るやいなや、元庵は向井家に古くから伝えられている着物や絵、道具などおよそ二〇〇点もの品物を船に積み込ませた。槌柄浦の人は次々と庄屋さんの蔵^{くら}から荷物を運びだされていく様子をみても、そのわけを知る人はおらず、不思議におもいながら眺めていた。

元庵は一品一品、品物が運び出されていくのを見るたび、これで村人を救えるとおもうと大きなよろこびを感じた。

品物は船によって大阪に運ばれた。どれも立派な品物であり、高い値段で大阪商人の手にわたっていくと、その金で米二〇〇俵を買って船は槌柄浦に戻ってきた。

その日から元庵は自分の屋敷でおかゆを炊き、村人たちに分け与えた。村人たちにとって米が喉を通っていくというのは何年かぶりのことであり、みんな涙を流して喜び、元庵に向かって何度も何度も手を合わせておがむ人もいた。

この大庄屋元庵のおかゆのうわさはたちまち広がり、向井家の門の前には三〇〇人もの人々が長い行列をつくったと伝えられている。元庵はその行列を眺め、自分のおこないは間違っていないと感じ、大いに満足したという。



道方 みちかた

○道方の浜

昔々、ちようど阿曾^{あそ}では不漁が続いて苦しい状況であったとき、道方にある『浜』を阿曾へ譲るとか譲らないとかいう話が持ち上がった。

海は先祖からの大切な授かりものなのだから手放してはいけないという者、自分たち

は農一途なのだから海は必要ないだろうという者。話し合いは長く続いたが、やはり道方は農村であり、海の重要性は多くの里人たちには響かなかった。農に励んでいた里人たちは、わずかなお酒と交換に、阿曾浦へ浜を譲ってしまったという。

大江 おおえ

○たこらさん

大江には『たこらさん』と呼ばれている山がある。頂^{いただき}から見えるのは瑞々^{みずみず}しくきらびやかな贅湾^{にえわん}と雄大^{ゆうだい}な



熊野灘^{くまのなだ}であり、さらに東には五カ^ご所^か湾^{わん}のリアス式海岸美を遠望できる。全国でも隠れ名山と呼ばれる美しく神秘に満ちた山である。このたこらさん、諾^だ・炬^く・羅^らと書くほか、このあたりでは多^た・幸^き・良^りと書くことも多い。

大江では人が亡くなると、翌年四月のお釈迦^{しやくか}様の誕生日に、その家の女の人がこのたこらさんにあがる。亡くなった人の魂は天にのぼると言われ、天に近いたこらさんにあがってお詣^{まい}りをするのである。このときあがるのは必ず女の人でなければならない。たこらさんには男の神様と女の神様がいて、四月のお詣^{まい}りで男があらると、神様がやきもちを妬^やくという。ただ妬^やくのではなく、妬^やいて槍^{やり}の雨を降らせるといっているのであるから、男たちはおそれあがらない。

さて、無事にお詣^{まい}りを済ませた女の人が鐘を鳴らしながら尾根^{おね}を下り、山づたいに戻ってくると、寺では花まつりが始まるのである。

また、たこらさんの山頂には石仏があり、この石仏がいろいろな姿に身を変えて大慈大悲^{だいじだいひ}を与えてくれるという言い伝えがある。昔は老若男女^{ろうにやくなんによ}たくさんの参詣者が訪れ、たこらさんに出店がずらりと並び、たいへんにぎわったとか。

大江では次のような唄が昔から伝えられている。

ただたのめ 大慈大悲の地藏尊 たこらのやまの あらんかぎりは

(たこら山の唄の一節より)



○大江の大火 おおえ たいか

江戸時代のころ、大江村で大火事があった。大風の日であり、そのころの集落の家々は藁ぶき屋根でできていたため、火はあっという間に燃え広がったという。火は村中を包み、全村損失の被害であった。大江には古い書物が少ないが、この大火事で村にあった大切な書物がみんな焼けてなくなってしまったのだと伝えられている。

道行竈 みちゆくがま

○飛んだ八幡様 はちまん

道行竈では竈方ハケ村の共同祖神として八幡様を祀っていた。ある夜、禰宜さんの夢に八幡神像が現れて、「大方竈へ行かねば滅びる」とのお告げがあった。

そのとき祀っていた宮の本殿の扉がゴトゴトと音をたてていたので禰宜さんは驚いてとび起き、宮へ駆けつけてみると、神様がカツラ峠（道行竈から阿曾浦にいく途中



の峠)のほうへ飛んでいくのが見えた。禰宜さんが慌てて後を追ってみると、神様はカツラ峠にある二本松の石の上に止まって、しばし休んでいたという。

大方竈へ行かねば滅びるということであつたから、禰宜さんは神様を背負って大方竈へお遷うつした。大方竈入口の海岸には美しい石があり、村人はしばらくそこに八幡様を祀まつったそう。

○竈山かまやまの大火たいか

あるとき、このあたり一帯で大火事があつた。火は山へ燃えうつってどこまでも延焼えんしょうし、道行竈の人家は一軒残らず焼け失せたという。

この年、頭屋とうやの祭りを控えていたが、宿をつとめる家がないことになってしまった。しかし庄屋さんの家がいちはやく再建されたので、かろうじて宿ができ、祭りを絶やさずに済んだと伝えられている。

○いち十さん^{じゅう}

昔々、道行竈^{みちゆくがま}に『いち十さん^{じゅう}』と呼ばれる人がいた。名前を小松作右衛門^{こまつさくえもん}という。作右衛門は幼少のころより『一を聞いて十を知る』と言われるほど聡明^{そうめい}であり、村の人々は感嘆^{かんとん}のあまり「いち十さん」と呼んだ。そのうえ作右衛門は体が人なみはずれて大きく、腕力もあり大変樂觀的な性格の明朗闊達^{めいろうかつたつ}な人柄であったと伝えられ、人々に慕われていた。自然と人々の指導者となる資質をそなえていたのである。

あるとき作右衛門は、一之瀬^{いちのせ}の一带を開墾^{かいこん}することを決心した。今は野見坂を越えると眼下^{がんかい}一面に一之瀬の広い田んぼが見渡せるが、当時このあたりは人手の入らない荒れ果てた山であった。作右衛門は村人の暮らしを立て直すため、ここを田んぼに変えようと考えたのである。

作右衛門は村人たちにこのことを話したが、一〇数町歩^{ちゅうぶ}に及ぶ山間の荒地の開墾^{くわ}など夢のような話であり、多くの人は首をかしげたという。このころは手と鋤^{くわ}、ツルハシだけが頼りの時代であった。

しかし作右衛門は諦めず、勇気をだして一步一步進めばやがて一が十に、十が百になり、大きなものを生み出すことができるかと熱心に村人たちを説いた。とうとう村人たちは作右衛門の熱意に動かされ、協力することを心に決めて、ついに



は開墾かいこんを成し遂げたのである。

一之瀬開墾いちのせかいこんのうわさは広まり、付近の村々はこぞって作右衛門を庄屋に望んだという。苦しんでいる人々を見ると放っておけない性格だった作右衛門は、この申し出を快く受け入れて南中村（度会町）、礪浦はげうらなどの庄屋を次々にかねることになった。

そのころの礪浦はたいへん貧しい漁村であった。村の漁師たちがその日暮らしの生活に明け暮れているのを見て、作右衛門は庄屋になった日から、この漁師たちの生活を少しでも良くしたいと念願していた。

なにかいい方法はないかと考えていたある日、作右衛門はついに方策を思いつき、伊勢の河崎にある魚問屋に借金の申し入れをした。

五〇両という大金を借り受けた作右衛門は、その金の半分で漁師たちに苧お（麻あさ）で大網を作らせ、残った半分の金を漁師たちの生活費にあてたのだった。

しばらくして大網が出来上がり、あとは漁を待つばかりとなった。作右衛門たちは辛抱強く時を待ち、とうとう秋になったときに突如サンマの大群が押し寄せてきたという。

それからは大漁に次ぐ大漁で、まるで作右衛門が呼び込みでもしたかのようにだと漁師たちは言い合った。生まれて初めての大漁に、漁師たちは喜びながら網を引いた。

こうして日々の生活に困っていた漁師たちの暮らしは安定し、村は豊かになった。作右衛門は礫浦の漁民から神様のようにしたわれ、漁民たちはこの恩を忘れてはいけなないと、大漁のあるたびに作右衛門へ感謝のしるしとして魚をおくったといわれている。

多くの村民に慕われた作右衛門は明治二三年（一八九〇年）、七八歳でその生涯を閉じた。道行竈一帯の人々のために尽くした作右衛門をたたえるため、南中村のお寺には墾田碑こんでんひが建てられたという。

阿曾浦あそうら

○ボラ漁の騒動

昔、この地域一帯でボラ漁が盛んであったように、阿曾浦もボラ漁でたいへん繁盛した。沖にボラの大群を見つけると、山の上のボラ番小屋から合図を送り、漁師たちが力いっぱい一斉に舟を漕いでボラを追った。

本来ボラの背は黒に近い色であるが、それはもうおそろしいほどの大群で、海が真っ赤にみえるほどだった。海上ではボラが跳ね、舟に飛び込んでくる。



あまりの多さに懷にボラを隠し、持って帰るつわものもいたという。

○古^こ和^わおそろしや

阿曾浦には竹を割ったような性格の、気の荒い漁民が多かった。他の村との争いは日常茶飯事であり、たびたび内でも外でも喧嘩^{けんか}をしていたが、特に古和の人々とはよく争った。気性^{きしょう}猛^{たけ}々^{だけ}しい阿曾の男衆だったが、気の荒さでは古和の男衆も負けていなかったという。

ときどき、近隣の村中が集まって会合や行事がおこなわれることがあった。この集まりが阿曾でおこなわれる際には、他村の人たちはよく舟を漕いで阿曾にやって来た。あるとき、この会合が終わるころに古和の男衆と派手な喧嘩が起り、激しい争いの末に古和の男衆が乗った舟を襲い沈没^{ちんぼつ}させたことがあったという。

喧嘩早い阿曾の男衆であったが、それでもいつも勝つわけではなく、時にはやりかえされることもあったので、阿曾では「古和おそろしや」という文句が昔から言い継がれているとか。

○大和尚だいおっさん

片山寺へんざんじの背後にある標高二〇〇メートルを越える北山を、里人は大和尚山だいおっさんと呼び、親しんでいる。この呼び名は今から四〇〇年ほど前にいた片山寺の大和尚だいおしょう、崇山そうざん禅清大和尚ぜんせいだいおしょうからきている。

崇山そうざんは慶長六年けいちよう（一六〇一年）に阿曾浦に生まれた。幼いころから大變聰明そうめいな子どもであり、崇山が九歳になったとき、長韻和尚ちよういんおしょうに見込まれて弟子になった。

それから十年間修業の日々が続いて崇山が一九歳になったとき、自分を教え育ててくれた長韻和尚がなくなった。そのため若くして寺の責任者である住職となったのである。

ちようどそのころ道方みちかたの法雲院ほううんいんに、京都の有名な妙心寺みょうしんじから大疑和尚たいぎおしょうが来ていた。大疑和尚は近くに崇山という若く立派な和尚がいると聞いて、さっそく会いに行った。

大疑和尚は崇山と会ってしばらく話をする、まだ若い崇山の落ち着いた応対と、仏教に対する深い知識や信念の強さに感心した。そしてここに置いておくのは惜しいとおもい、自分の師しである岐阜県の名僧、愚堂ぐどうのもとへ崇山を連れていくことにした。

「伊勢の国でなにか珍しいものはあったか」と問う愚堂に、大疑和尚はにこりと笑いながら崇山を引き合わせたところ、愚堂和尚は一目見て崇山を自分の弟子にしてしまったという。

愚堂のもとで熱心に修行を続け、ついに立派な僧となった崇山の評判は四方に広がった。崇山のもとに多くの小僧たちが教えを受けに来るようになる、ますます有名になり、当時の大名たちも崇山の教えを受けて心を動かされ、寺を建てたという。

崇山にはたいへんな勇気があり、誰もができないで困っていることがあっても、阿曾浦男の元気を出して物事を解決していったという。思い切った考えと行動力には、他の和尚たちも感心せずにはいられなかった。その人柄も親しまれ、後に大疑和尚は崇山のことを「ときどき自分のところへ来てはチクリと痛いところを刺していく、蜂はちのようなやつだ」と褒めたと伝えられている。

慶安元年（一六四八年）、崇山が五〇歳になろうとしているとき、とうとう妙心寺みょうしんじの第一座だいいちざという重役につくことになった。崇山は責任ある重い役につくことになっても、自らの力を精いっぱい出し切ったと評されている。

やがて阿曾浦に帰ってきた崇山は、村中の人々のお祝いと喜びの中に迎えられた。
延宝五年（一六七七年）、阿曾里の靈泉庵れいせんあんと呼ばれていた寺を崇山和尚がその弟子である南嶺なんりやう禅立和尚ぜんりつおしょうと檀徒だんとに命じて建てなおし、寺号を片山寺へんざんじ、山号を靈泉峰れいせんほうと改めた。

崇山は片山寺ちやうかいざんの中興開山と呼ばれ、時の朝廷ちやうていから大光慈照だいこうじしやうぜんじ禅師という名誉ある名



前を送られたという。

いまでも阿曾浦の大和尚^{だいおっさん}山の山頂には、偉大なる禅僧^{ぜんそう}崇山禅清大和尚がねむり、村の人たちを見守ってくれている。

阿曾浦の漁師が泊りがけて漁へ出て、荒波にもまれて里へ帰ってきたとき、遅^{たぐま}しい海の男たちも大和尚山の山頂が見えてくると、やっと着いたと安堵^{あんど}の胸をなでおろしたとか。

○苗字の由来

明治のはじめ（一八七五年）、平民に苗字が許されたとき、阿曾の場合は片山寺の住職に苗字をつけてもらった。山の下だから山下、港口の付近に居るから湊川、村の中だから里中、といった具合だったそう。なかでも阿曾浦の『里』で姓を持つ家は、古くは上村、嘉正、浜川、森、山本の五家であったという。

○安乗明神とアガ島^{あのりみょうじん}

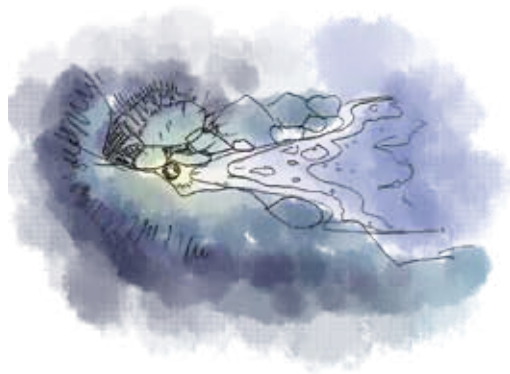
古老の伝説にいていつの出来事やら不詳であるが、昔々の話。安乗神社^{あのりじんじや}はかつて志摩郡安乗村に鎮座していたが、津波のために流されきたりて、阿曾浦港口にある暗礁^{あんしやう}に掲げられた。ある人が見つけて拾い請け、今の阿曾神社に合祀^{ごうし}したと伝えられている。

安乗村の人々は、安乗神社が流されたあと阿曾神社に奉斎^{ほうさい}されたと聞くと、村から毎年総代を選んで報賽^{ほうさい}したという。当時の漁師たちは、「神のよりしろ岩」としてこの近くを舟で通るとき、「ツイドロ」と唱えて崇めていた。そのころ、この暗礁を阿曾の人たちは『アガ島（アゲ島）』と言った。橋の名前は明神橋と呼ばれる。

大方竈^{おおかたがま}

○大方竈のはじまり

古老の言い伝えによると、大方竈は文禄三年（一五九四年）に隣村である道行竈^{みちゆくがま}から分離し、ここへ居定めたといわれている。



しかし、大方竈の大智院だいちいんの開創かいそうはそれより約六〇年の昔といわれているため、これは古老の口碑伝説こうひでんせつの訛伝かでんとするものか、村ができる前に当寺院があったのか、あるいは現在の在所は開基かいき当時と異なるか・・・詳しいことはわからない。

この大智院の中には木で作られている子安の地蔵があり、子どもを授かりたい方が訪れる。お祭りの日にそなえたお茶を飲むと無事に出産できるともいわれているそう。

○八幡宮はちまんぐうの盗難

大方竈にある八幡神社はちまんじんじやは竈方協同の宮である。御神体は平重盛たいらのしげもりが馬にのった騎馬神像であると伝えられている。昔、ある魚屋が魚をさばく包丁で本殿の扉をこじ開け、御神体を盗み出して他所へ売ってしまったことがあった。

いったい誰かと村中騒ぎになったが、後になって折れた包丁が証拠となり、犯行が発覚したという。



第二章

旧南勢地区の民話

切原 きりはら

○雨ごいの言い伝え

切原でも雨ごいは盛んにおこなわれ、次の手順でとりおこなっていた。

まず、神にまいる日待ちをする。それで三日経っても雨がないうと、蓑 みの かさをつけて浅間さんまいりにのぼり、「ヨッピデ朝がえり」をして祈る。さらに三日経っても雨がないうと、白滝 しらたき の不動へ願をかけ、滝つぼかえというて、滝つぼの水をすべて出して清めるといふ。

それから三日して効がなさそうなときは、庚申 こうしん さんへ裸足で百度まいりをする。そこで水ゴリをとり、観音さん境内の庚申 こうしん さんへ、若い衆がお百度をふむのである。雨ごいに関して、次の唄が伝えられている。

よそのやけ田はどなろうとままよ　おらのやけ田へ雨たもれ　なむ浅間大ぼさつ・・・

○天狗岩 てんぐいわ

天狗岩 てんぐいわ と呼ばれる大きな岩がある。天狗は機嫌が良いと、この岩の上に笛を吹いたり太鼓を打ったりして賑 にぎ やかに踊り込んでくるといわれている。また、天狗松 てんぐまつ という大きな松の木があり、松の木の根元には石地藏が

祀^{まつ}られていたという。天狗松は今から一〇〇年ほど前になくなってしまったそう。

○井溝^{ゆみぞ}

ある人が切原の岡出のユミゾ（井溝、田んぼの水路）を通りかかったときのこと。狐に化かされたとみえる人が、風呂にはいったつもりで「あア好^いいかげんや」と、上機嫌^{じょうきげん}でいたという。

○八瀬宜山^{はちねぎさん}

伊勢市との境界にあたるこの山は、八瀬宜山^{はちねぎさん}と呼ばれる。昔、伊勢神宮から来た八人の瀬^ね宜^ぎがここに登り、外洋内湾^{がいようないわん}の変化に富む風景を眺望^{ちようぼう}して、景色を褒め称えたのでこの名がついたといわれている。



○ウーンの祭り

切原には「ウーンの祭」と呼ばれる、たいへん風変わりな祭があった。天狗面をかぶった恐ろしい形相の山の神が家々を深夜に訪れ、ウーンと異様な声でうなり声を出すのである。

祭の当日、大頭屋にあたる家が天狗面をかぶり、夜の一〇時ごろから真っ暗がりのなか、村中をまわり始める。村人たちはウーンに出会おうとおののいて死ぬとか、病気になるとかで恐れ、ウーンのまわる間は家の中に閉じこもって絶対に外出しなかったという。

このウーンが家の前に訪れてウーンとうなり声を出すと、家のなかにいる妻がそれを聞いて「留守でござる」と返事することになっていた。古くは一重ねの小さな鏡餅^{かがもち}を差し出したといい、妻の返事がないと、ウーンのお供が裏まで入り込んで「タイトリにまいった」と請求したそう。ひとしきりウーンは家々をまわり終えらると、神社へ戻っていった。

いつしかウーンは妖怪の訪れのように伝わり、ウーンが大切な家の主人をとりにくるので、妻が「留守でござる」と言って居留守を使うものと思われていたが、これは誤解だそう。もし、家に病人や貧乏神^{びんぼうがみ}などの災厄^{さいやく}のある場合は藁人形^{わらにんぎょう}をつくり、それに病をうつしてお供に渡していたので、除災^{じよさい}が主であったといわれる。土地の古老の話では、ウーンは俗称^{ぞくしやう}であり、正しくはヨキノモノであったという。ヨキノモノとは除災者という意味であると思われる。

さて、このウーンの祭りは毎年大晦日の夜更けにおこなわれていたのであるが、いつしか当人たちが酒を飲んで酔っ払い、めっちゃくちゃなことになってしまった。これでは神事にならないということとなり、ついにはなくなってしまったと伝えられている。

五カ所浦

○鹿の皮

五カ所浦に助七という人がいた。あるとき助七は狼が鹿を喰いかけているところに行きあい、「俺が料理してやるから皮だけくれよ」と言って皮を剥いでもっていったそう。助七が皮を剥いでいるあいだ、狼はおとなしく見ていたという。

○劍祖 愛洲移香齋

今からおおよそ五五〇年ほど前、日本が戦国時代であったころ。伊勢愛洲氏出身の移香齋は武者修行のため、日本中を旅していた。そして三〇余歳のとき、日向国の鵜戸大権現（現在の宮崎県鵜戸神宮）に着いた。そこで移香齋は鵜戸大権現の洞窟のなかで香を焚き、祈禱を始めた。声一つない静けさの中で祈禱をおこなっていた二一日目の明け方、ユラユラと影が揺らめいてクモが突然目の前に降りてきた。このクモを払いのけようとしても、つかんでおさえようとしても散り散りに四散して、つかめない。その変幻自在の様子をみて、ついに移香齋はひとつの閃きを得た。

すると奇怪なことに、そのクモが老翁に変わった。老翁はこれを『陰流（影流）』と呼び、世の中に広めるようにと移香齋を悟したという。こうして開眼された陰流は、後の世にタイ捨流、柳生新影流など、二〇〇余の流派を生むこととなり、のちに愛洲移香齋は劍祖と呼ばれるようになった。



齋田^{さいいた}

○齋田の管^{すげ}

齋田には伊勢神宮の御田があり、昔はお田植え祭りもおこなわれていたという。齋田の沼沢地^{しやうたくち}には管^{すげ}が多いので、それを刈りにとって莫蔭^{もぎ}を作った。また、蓑^{みの}と笠^{かさ}を作^{つく}って神宮に献納^{けんのう}していた。

昔、大きな津波があ^あって沼沢^{しやうたく}の管^{すげ}が全部枯^{かわ}れてしまったことがあ^あった。しかし、刈^{かり}り^りと^とった管^{すげ}を所蔵^{しよざう}している人が齋田村にいたので、それを神宮へ献納^{けんのう}することができ、その功^{こう}によって神宮から「大司」の姓^{せい}を授^{さづ}けられたという。

船越^{ふなこし}

○ヘイダイコ

明治のころ、船越にはヘイダイコというタヌキが棲^すんでいたという。このヘイダイコがいろいろな姿^{すがた}に化^くけ



て人を驚かすので、村で騒ぎになったことがあったそう。

内瀬ないぜ

○クルマダ

内瀬の小字にクルマダというところがある。車田くるまだという地名は、神社の祭祀さいしでつかわれる稲を育てている田んぼである「神田しんでん」などを他の田と区別するために、稲を輪の形に植えたことからきているそう。

伊勢路いせじ

○ゴジラ浜の由来ゆらい



暖かくなってくると、村の子どもたちは「昼からゴジラ浜で泳ご」と話していました。当時は「ゴジラ浜？伊勢路にはゴジラがいたんやろか」と不思議に思うこともありましたが、それ以上はわからないままでした。それから半世紀よりもっと時間が経ち、自分が働き出してから、ゴジラ浜のことを偶然聞くことができました。「わしは伊勢路の出や。伊勢路にはゴジラ浜というところがあって、わしはその近くに住んでおったんや」とその方は言い、昔話を教えてくれました。

「なんでゴジラ浜と言われとるかという、昔の伊勢路川は水も深くあって、炭を運ぶ舟が行き来しとたんやな。それがある時、大地震が起きて津波が来てな、伊勢路川に舟が上がってきたんやて。その舟の名前が五次郎丸ごじろうまると言うてな。五次郎丸が流れた浜やで、みんな五次郎ごじろうヶ浜がはまと呼んでおったんや。それがだんだん五次郎浜ごじろうはまと言われるようになって、最後にはゴジラ浜になったんやて」



場所は伊勢路の奥から流れて世古地せこち手前てまへの大きく右に曲がった川辺あたりだと言われているが、今では河川改修に伴って正確な場所を知る人が少なくなったそう。ある人に聞いたところ、ゴジラに似た岩があったという。
(伊勢路 潜道けい氏より聞書)

相賀浦 おおかうら

○平九郎の延命地蔵 えんめいじぞう

相賀浦の六地蔵ろくじぞうは漁夫たちの信仰の対象であり、特にカツオ船の出漁中に村の人々は安全を祈った。その昔、大津波が起きたときにこの六地蔵が埋まってしまったが、網をひいても五体までしか集まらなかった。それから不漁が続いたというので、平九郎という人が一体お地蔵さんを祀まつったところ災害は去ったという。その翌年、古い地蔵が出てきたので、平九郎の地蔵は延命地蔵として別に祀られるようになったと言い伝えられている。

○カンコロボシ

相賀浦の海や川では、古くからカンコロボシの伝説が言い伝えられている。これは河童かわづまのようなもので、お盆に海や川で泳ぐとギンボ（尻）を抜かれるといい、村人たちはこの時期に泳ぐことを避けた。時期については天王さんの前後ともいわれる。

この厄除けの御札は縁日に相賀の寺で用意された。この御札を竹の皮で包んで両端に穴をあけ、紐を通して首にかける。大人でも貝を採る際、カンコロボシにギンボを抜かれないように、このお守りを首にかけて海に潜っている人もいたという。

○ヨナゴの奥

阿曾浦との境に近いヨナゴの奥は、ことのほか山が深いといわれていた。昔は狼がいつもいたらしく、しばしば狼のものすごい声がきこえたと伝えられ、村の人は恐れて近寄らなかった。

○夜泣き封じ

赤ん坊が夜泣きをして泣き止まないとき、「猿沢の池のほとりに泣く猿に、昼は来るとも夜はこんこん」と書いたものを、寝間の下に敷くと夜泣きがなおるといわれている。また、橋の欄干を削って赤ん坊の寝床の下に敷くのも効果があると伝わっている。



○黒船騒動くろふねそうどう

安政二年（一八五五年）、五カ所湾口に突然黒船が来たと村中大騒ぎになった。人々は大変驚いたが、兎にも角にも庄屋さんへ伝えねばと、さっそく異国船が来たことを註進した。

これを受けて大庄屋向井善十郎組の者、十数名が現地へ向かった。同船のもとに着くなり事情を訊いてみるものの、まったく言葉が通じない。異国の者はなにやら仕切りに求めるような仕草をするが、一同ますます当惑するばかりであった。しかし相賀浦の庄屋十右衛門が、異国人たちは水、米、柴などをわけてくれと言っていると察し、皆々で大いに面目を施したという。そのあと、礫浦に碇泊を命じ、礫浦から相賀浦へ、相賀浦から阿曾浦へとカツオ船で村送りに曳船し、紀州から長崎へ送ったとされている。

田曾浦たそうら

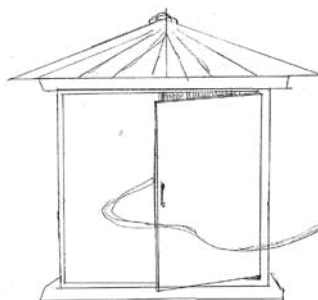
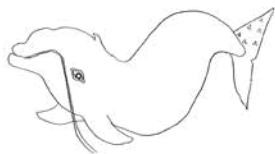
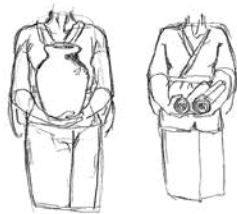
○唐船騒動からふねそうどう

安政二年（一八五五年）、田曾浦の庄屋と肝煎役が鳥羽藩の急使として、津の城に駆け込んできた。事情を

訊くと、田曾浦の沖合に三本マストの異様な外国船が碇泊^{ていはく}しているので、即刻御出兵を願いたいとのことであつた。

お城ではすぐさま「戦争だ」と大騒ぎになり、第一陣として藤堂藩^{とうどうはん}では藤堂織部が八〇〇余名の兵を率いて現地へ急ぎ、その翌日には第二陣の藤堂出雲が九〇〇余名を率いて出発した。

ところが道中、あれはただの中国船であつたとの報が入り、一同張り合い抜けして帰ったと伝えられている。



南伊勢の民話 掲載一覧

◆旧南島地区の民話

新桑竈

- 姫越山に眠る黄金千両

古和浦

- 黄金神像
- 古和のせんげんさん
- 観音さまの夜歩き
- 熊野の「海の大男」

阿曾浦

- 阿曾と相賀の境界
- 阿曾浦の豪傑

伊勢地

- 夫婦岩

その他

- 鼠群移動
- 船幽霊

◆旧南勢地区の民話

五ヶ所浦

- 牛鬼
- ご免岩の雨ごい
- 正泉寺の梵鐘
- よめぬ穴と御所島
- 五ヶ所の魚売り
- 医王寺の薬師
- 合神
- うそ平
- あわて者の平吉どん

船越

- 龍仙山の鬼
- 白馬の瀧（駆け足の瀧）
- 岩船池の主
- おめき岩
- 幽霊畑（ゆうれんばたけ）
- 喜惣次の直訴
- よのけ谷
- なしが谷（内侍谷）
- 花川（はなご）の井戸
- 土宮

切原

- 飯盛山の鐘
- 仁兵衛・儀兵衛のこと

- ホーロク岩
- 引法石
- 命石（メイシ）
- 刈屋川
- 白瀧
- 堂広（どびろ）
- 銭塚
- 剣峠

中津浜浦

- 風呂の井（阿弥陀湯）
- 弘法池
- 船越との境界争い
- 茶臼島
- 鉄のじんろく・鋼のまさぞう
- 長浜ばばあ
- ヤツタの鏡

飯満

- 地名のいわれ
- 飯満・五ヶ所浦の仲たがい
- ばくち和尚

泉

- 七日島
- 首切岩
- 三本松
- あかさき

神津佐

- 神津佐のカラス
- キツネ封じ
- 愛洲滅亡

下津浦

- 飛枘大明神
- 五輪坊
- 八幡
- 長光寺の踏石

木谷

- 小田の磯石
- 鳴浜（木谷産土神）
- 琴ヶ島

内瀬

- 村島（高浜島）
- 袖引
- 水神池と源太

伊勢路

- 石畳の宝
- 駒田
- 隠れ谷
- 穴口
- 行者山の天狗

斎田

- 日踊山
- 大歳社
- 大歳社の池
- 万女郎淵
- 流れ着いた獅子頭
- 弘法の足と杖の跡

始神

- 大火と引き白
- 石くよさん
- おめきの森

押淵

- 鬼ヶ城
- 白瀧
- 長峰山の胎内仏と塚土居

迫間浦

- 坊主岩
- 西之菴

礫浦

- 礫石
- オーメ松
- 浅間山の石

相賀浦

- 局ヶ頂（鋸山）
- 赤石の鼻
- 相賀の人柱
- 水難者のたたり
- 黒崎の岬

田曾浦

- 城山コモンソの松
- アチニワの姫塚
- 御崎神社

宿浦

- 宿浦の薬師さん
- 行者松

続 南伊勢の民話 掲載一覧

◆旧南島地区の民話

棚橋竈

- くさ島（いくさ島）
- 狼の話
- 平氏の鎧塚

新桑竈

- 新桑竈の中井戸
- 魚の谷の天狗さん
- アマコロビと膏葉
- 新桑のクツワムシ
- 大蛇の話
- 子安の地蔵
- 新桑竈の救世主 島田亀楠

古和浦

- 法眼寂円と古和一族
- これより先ストーロク
- 軍船撃退
- 天狗松
- 勘太風

栃木竈

- 天神山
- 栃木竈の雨ごい

小方竈

- 天才画家 野村訥斎
- 区民の鏡と呼ばれた人

方座浦

- 最初の六十四軒
- 自慢の方座ウルメ
- 方座浦の浅間さん
- 方座浦の鬼門日

神前浦

- 与崎の松
- 飛鳥浜
- 倭姫命腰かけ岩と神前浦
- 定有と吉津党
- 薬師城址
- 村民に慕われた加藤市右衛門

村 山

- 雨ごいの言い伝え
- 山の神さま
- ダリ

伊勢地

- 伊勢地の由来
- シューリさん

河 内

- 三谷山の龍
- 陸の龍宮と呼ばれた場所
- 海からあがった観音さま
- 延命地蔵
- 蘇のバクチの木
- 吉凶占う奈津浜の三棚神事
- 猪ノ目模様入りの石灯籠
- 河内の山での言い伝え

東 宮

- 新田開発に夢を託した男
- 江戸の大商人 河村瑞賢
- 瑞賢さんの逸話

奈屋浦

- かさらぎ池の龍
- 奈屋浦のはじまり
- こうもり穴小輪と、くじら島
- えびすさん・弁天さん
- 支毘の神さま

贅 浦

- ソラガミサン

槌柄浦

- 稻荷社の神霊
- 新村の創始者
- 大庄屋 向井家

道 方

- 道方の浜

大 江

- たこらさん
- 大江の大火

道行竈

- 飛んだ八幡様
- 竈山の大火
- いち十さん

阿曾浦

- ボラ漁の騒動
- 古和おそろしや
- 大和尚山
- 苗字の由来

- 安乗明神とアガ島

大方竈

- 大方竈のはじまり
- 八幡宮の盗難

◆旧南勢地区の民話

切 原

- 雨ごいの言い伝え
- 天狗岩
- 井溝
- 八幡宜山
- ウーンの祭り

五ヶ所浦

- 鹿の皮
- 剣祖 愛洲移香斎

斎 田

- 斎田の管

船 越

- ヘイダイコ

内 瀬

- クルマダ

伊勢路

- ゴジラ浜の由来

相賀浦

- 平九郎の延命地蔵
- カンコロボシ
- ヨナゴの奥
- 夜泣き封じ
- 黒船騒動

田曾浦

- 唐船騒動



参考資料

- ・南島町史(昭和六〇年) 南島町町史編集委員会
- ・南勢町誌(昭和六〇年) 南勢町誌編さん委員会
- ・南勢町誌(平成一六年) 改訂増補南勢町誌編纂委員会
- ・南勢町南島町山漁村習俗調査報告書(昭和四八年) 三重県文化財連盟
- ・相賀浦郷土史(昭和四四年) 村田米吉・相賀浦漁業協同組合
- ・勢州の一隅(昭和五六年) 松本和助
- ・南島人物読本(昭和六二年) 南島町教育委員会
- ・商人を越えた日本の偉人 河村瑞賢(第一次改訂版)(平成三〇年) 南伊勢町教育委員会(初版平成六年 南島町教育委員会)
- ・奈屋浦四百年の歩み(令和二年) 加藤多喜男



続 南伊勢の民話

2022 年 3 月 初 版 発 行

2022 年 4 月 第二版発行

編集発行 南伊勢町教育委員会
(編集者 山本 瑞記・中村 一裕)

題 字 服部 一孝 (上下水道課)

挿 絵 植村 泰士 (水産農林課)

続
南伊勢の
民話

